
王人

鉄骨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王人

【Nコード】

N45620

【作者名】

鉄骨

【あらすじ】

神様が人生の試練を与えすぎてしまい、苦難の連続だった主人公。新しい人生は幸福にしてくれると神様は言っていたが…？

0話 「ありがちなプロローグ」

0話 「ありがちなプロローグ」

「あゝ、まじか……」

手元の白い紙に目を落としながら呟やく。

『採用試験選考結果のご通知

拝啓 時下ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、先日は当社入社試験にご応募いただき誠にありがとうございました。

厳正なる選考の結果、残念ながら採用を見送りましたことをご通知いたします。

ご志望に添うことができませんでした、何卒ご理解の程よろしく願いたします。

つきましては、ご応募に際し、お預かりしました履歴書を返却いたしますのでご査収ください。

末筆ではありますが、貴方様のより一層のご活躍をお祈りいたします。』

そんなテンプレートな文面が俺の持つコピー用紙に印字されている。

「今回は少し手ごたえがあったと思ったんだけどなあ」

狭いアパートの一室の中、今日何度目かわからない溜息をつきながら呟く。

大学4年の秋、この不景気の中いまだ就職の決まっていない俺は焦っていた。

周りの連中は8割方就職を決めて、卒業旅行やらなんやら、のんびりと過ごしている。

もう何社まわったのか、何通の履歴書を書いて送ったのか覚えてはいない。

「俺、そんなだめなやつかな……」

思えば今までの俺の人生は苦難の連続だった。まあ、今でもただど……。

小さい頃に父親が事故にあって死に、母親の再婚相手の奴に数年間虐待を受け、母親がそいつと離婚して安心したかと思ったら、今度はそいつが母にストーキングをかまして、母親を階段から突き落として母が入院。

そこで母方の祖父母に俺は預けられたわけだが、そこでまたしても虐待。

なんとか高校に入ったのはいいが、アルバイト三昧でこれといった友達も出来ず。奨学金で大学に入ったのはいいが、去年母親は癌で他界。

よくグレずにここまで生きて来れたよな……。

「……寝よ」

深夜、俺はふいに目が覚めた。なんというか、イヤゝな予感。

ああ、これは来るな……。

そう思った瞬間、俺の体が硬直する。腕や足はおろか、指の先まで身動きが取れない。

目は瞑っているのだが、何故か目や瞼だけは動かすことが出来る。

そう、金縛りだ。

正直なところ、金縛りには慣れている。

そりゃ、初めての時はびびったが、今では特に怖くはない。まあ、嫌な感覚だが時間が経てば解けるのはわかっている。

……解けないぞ？

まあいいや、寝ちまおう。

『寝るな、バカ』

なにやら幻聴が聞こえる。

幻聴が聞こえるのは今日にはじまったことじゃない、声らしきも

のが聞こえたことは今まで何度もある。
つまり、ここはシカトだ。

『聞こえているのならシカトするな!』

おお?今日はやけにはっきりした幻聴だ。

『幻聴じゃないって』

んゝ、あんた誰よ?

『あゝ、お前の守護霊ってとこかな』

成程、守護霊か、わかったから早く金縛り解いてくれ。

『動じないな、さすが俺の子孫だ』

え? 守護霊って俺のご先祖様なんだ?

『当たり前だろう、守護霊ってのはそういうもんだ』

ふゝん……。で、ご先祖様が何の用? 明日も午前中から面接あるんだから寝かせてもらえる?

『まあそう言うな、やっと俺の声が届いてるんだ、少し黙って話聞きな。……まあ、聞きたくなくても聞こえちまうし、寝かせないけどな』

……しようがないな、聞こうじゃないか。

『最初に聞くが、お前今幸せか?』

また難しい質問をしてくるな、ご先祖様。

『難しいか?』

そんなもん、人それぞれじゃないか。

俺にとつての不幸が人によっては幸せと感ずるかも知れないし、その逆も然りだ。

『まあな』

下を見ればきりがなし、まあ、今生きてるし幸せなんじゃないかな。

『そりゃ良かった。守護霊冥利につきるね』

いや、あんた正直守護霊としてはダメダメだろ。

守護霊なんだったら、もうちょっとしっかり俺を護れよ。

『おま!?! 俺だってかなり頑張ってるんだぞ!?!』

知らねーよ。せめていい就職先見つけてくれよ。

『おお!! それそれ!!』

ん?

『今後のお前のことだけど、なんとかかなりそうだわ』

おお！？ まじ？

『おお！ 神様に頼んで、いいところ紹介できることになったから、期待してろ』

そりゃ嬉しいわ、どこの会社？

『それはまだ言えない……っつか俺も知らん、今後のお楽しみってやつだ』

知らないのかよ！？

……ところでさ。

『ん？』

母さん、元気なん？ 父さんも。

『ああ、今はこっちで修行頑張ってるぞ。俺とは霊層が違うから会ってないけどな』

……そっか。

『んじゃ、そろそろ行くわ』

あいよ、長い幻聴だった。

『幻聴じゃね〜って』

はいはい、そういうことでこれからよろしくお願いします、ご先祖様。

『んじゃな』

俺はそのまま意識が沈んでいくのがわかった。

――翌日

どうにも微妙な手ごたえで通算何社目かの面接を終えた俺は、駅のホームで電車を待っていた。

俺の後ろには仕事が終わったサラリーマンや学生なんか俺を先頭に列を作って電車を待っている。

『――に、快速電車が通過します。危ないですから黄色い線の内側にお下がってください』

少し遠くのスピーカーからアナウンスが聞こえてくる。

俺は自分の携帯に目移し、就職情報サイトを閲覧していた。

遠くから、目の前のホームを通過する予定の電車の音が聞こえてきたその時――。

ドンッ――！

俺は背後からの衝撃に耐えられず、そのまま前のめりに目の前のホームに転落していくのだった。

1話 「あの世？」

1話 「あの世？」

えーっと、ここはどこだ？

目の前には見渡す限りまっ白い空間が広がっている。

……誰もいないな？

「ヤッホー！ー！！」

無駄にでかい声を出してみる。

……うん。どこにも反響しない。

んじゃ、さらにでかい声で……。

「やめんか」

「うお！？ いつの間に！？」

白いひげの爺さんが背後から声をかけてきた。

もしかして初めからいたのかな？ ……恥ずかしすぎる！

「おぬし、あんまり驚いておらんな」

「いや、驚きましたよ。いきなり声かけられて」

「この空間のことについてじゃよ」

そりゃ、大体予想はついてますよ。

「俺、死んだんですよね？ ……それで、あなたは神様？」

なんか、自然と敬語っぽくなってしまふ。

「うむ、その通りじゃ」

「そっか、ちなみに自分の死因はわかるんですけど、原因を教えてくださいませんか？」

「うむ、おぬしは背中から押されてホームに転落して電車に轢かれたわけじゃが、押したのはおぬしの元父親じゃ」

「……あいつか」

母親のストーカーやってたあいつならわかる。昔は殺されると思ったことは何度もあったけど、まさか本当に殺されるとはね。

「今、あいつどうなってるんです？」

「目撃者がたくさんいたしの、もちろん逮捕されて刑務所の中じゃ」

「そうですか。……あの守護霊、やっぱり俺のこと全然護れてないじゃんか」

「おっほん」

神様が咳払いをして、少し気まずそうに俺に話しかけてくる。

「それで、今後のことじゃが、お主にはこのまま転生してもらうことになった」

「転生？」

「うむ、先日の会議の結果での。

実を言うとおぬしのこれまでの人生は、おぬしを成長させようとした、わし等からの試練じゃったんじゃよ。じゃが、ちょっと加減を間違えてしまったの。

あの守護霊に力がなかったのではないのじゃよ。ほんとすまんの。

」

そう言って、神様は俺に頭を下げてくる。

「……正直納得いきませんが、いいですよ。……それで、なんでそれが転生に繋がるんです？」

「うむ、わしらの間違いからおぬしに過酷な人生を歩ませてしまったこと。

また、通常なら死後は幽界で最低でも300年くらいは修行しなければならぬのじゃが、300年分までとはいかないが幽界での修行が必要ない程に魂は鍛えられ、汚れていないこと。

以上の理由から、すぐに別の肉体を得て人生をやり直してもらうこととなったのじゃ。

というか、他の神様からさすがに可哀そうだといった意見が出るのう。

転生先の世界はわしの管轄外じゃが、優遇させてもらうぞい」

「そうですか」

「希望はあるかの？」

「えーと、特に考え付かないですけど、家族、恋人、友人が欲しいですね。父はすぐ死んで、母は入院生活が多くてあまり会っていませんでしたし。」

働いてばかりで恋人はもちろん、友人もできなかったのだから」

「ふむ、なるほどなの」

「これって贅沢なお願いです？」

「いや、謙虚なほうじゃよ」

神様はにっこりと笑い、俺に向かって手をかざし、手から出る金色に光る雲で俺を包んでいった。

「それでは転生先でも頑張ったの。さっきも言ったが担当の神様が違うので、おぬしとはここでお別れじゃ。」

神様の声を聞きながら、俺は意識を失っていく。

「謙虚なお前さんに、特殊能力をひとつだけさあびすじゃ」

そんな神様のセリフを聞きながら。

2話 「赤ん坊時代」

2話 「赤ん坊時代」

気がつくと、大変美人な女性の顔が目の前にあった。
距離は拳一個分くらい。……っていうか近づいてきてる!?

ちゅっ

キスされてしまった……。嗚呼、俺のファーストキスが……。
こんな美人な人なら大歓迎だけど、もしかしてこれがご褒美って
ことはないよね?

というか、体が思うように動かない。
意識だけははっきりしてるんだけど、なんというか自分の体であ
って自分の体じゃないような、一歩引いているというか、微妙な感
覚だ。

言葉を話そうと思っても、口も回らないし、「あうあうあー」と
しか発言できない。

……どうやら今の俺は赤ん坊のようだ。ここからのスタートです
かい。

あれから一週間。大体把握してきた。

この世界の文化水準は大体中世ヨーロッパくらい。でも言語は何故か日本語。

どうやら俺のファーストキスの相手の超絶美人が俺の母親らしい。長くて綺麗な黒髪は絹のように柔らかくて、たまに肌にあたるのがなんとも気持ちがいい。匂いも最高だ。

肌は日本人みたいな黄色がかったような色をしているが、顔のつくりが違う。

一言でいえば、西洋人ぽいのだが、黒い大きな瞳は常に慈愛に満ちていて、俺の目から見るその女性はまだで聖母そのもの。

名前は マリア・ファア・レイナル。まじで聖母。

父親はまだ二回しか見ていないのだが、これまたかなりのイケメン。

名前は ヤン・ファア・レイナル。

一回目は西洋風の鎧を着て、ものすごい勢いで俺を抱き上げてきた。

少し乱暴に抱き上げられたから母ちゃんにものすごい勢いで怒られていたけど、その喜びようが手に取るようにわかった。

俺の前世でもこんな感じで、生まれたときに両親は喜んでいたのかな？

髪は赤くてちょい天パ入ってるけど、日に焼けた肌とワイルドな風貌ですごく似合ってる。多分きちつとすればこちらめちゃうくちゃかっこいいんじゃないか？

俺は子供みたいにはしゃいでる笑顔の父しか見たことないが。

俺の名前は アラン・ファー・レイナル と名付けられた。

この両親の子供である俺は、一体どんな容姿してるんだろね？

どちらに似てもかなりレベル高そうだよ？ 鏡とか見せて欲しい。

そうそう、神様の最後の言葉、能力についても把握できた。

頭の中で検索かけたら仕様もばっちり。

現在の能力レベルは1とのことだが、どうすれば上がってくんだらうか？

それは他人の強化能力。自分自身の能力強化じゃなくて、他人の発動条件は対象との接触。皮膚で接触する必要はないんだけど、こちらと相手が「触った、触られた」と認識していればOK。

どこかの星の最長老様のごとく、他人の色んな能力を引き上げることが出来るらしい。

そんで、その能力上昇具合は俺との親密度に依存するとのこと。

早速両親に能力使ってみたが、正直なところ変化が確認できない。

赤ん坊だからどうしようもないか。

ちなみに現在最大の問題点……それは排泄！

超恥ずかしい！ 何ですかこの羞恥プレイ！？

しかもおむつを換えるのはあの母親だよ！？

しかも換えるとき「いっぱい出たね」とか、すっげえニコニコで話しかけて来るんだよ！？

かといってトイレに行けるはずがないし、出さないわけにも行かないし、出したままほっといたら気持ち悪いし……。

できるだけ夜中はやらないように心掛けてはいるよ。夜泣きとか大変だって聞いたことあるし。あんないい母親に迷惑はかけられないです。はい。

3話 「才能」

3話 「才能」

あれから5年。

俺がハイハイしたり、立ったり、しゃべったり、その度に両親が狂喜乱舞していて、あまりの喜びっぷりに多少引いたりしつつ、特に何事もなく、平穩無事に過ごしていた。

俺が1歳くらいのときに親父が昇進したのか、家が広くなって、しかもお手伝いさんが5人になった。

内訳は男…1、女性…4で、みんなそれなりの年（30代〜50代）の人たちだった。

母さんが若い人（女性）を雇うのを許さなかった。てのが主な理由なんだけどね。

あと、家族が増えたよ。

3つ下に妹ができた。

可愛い。めっちゃ可愛い。

名前はフィアスって名付けられた。あの両親の子供だ、可愛くないわけがない。

フィアスは親父似の赤い髪で、少し気の強そうな瞳がたまらない。赤ん坊ってのは無条件に可愛いと思うけど、うちの妹が一番かわいいと思う。……兄馬鹿だって？ そんな馬鹿な。

今はもう2歳になるが、初めて俺の名前を呼んでくれたときは感動した。うん、両親の喜びっぷりがわかったよ。

最近の俺はというと、宮廷法術師のおふくろに魔法と勉強を教わりながら、たまに近衛騎士団副団長の親父に剣の手ほどきを受けている。

毎日の日課として、素振り1000本と法術の勉強を怠ってはいない。

ちなみに見た目についてだが、これについては心の底からあの神様に感謝してしまった。

黒曜石のような輝きの黒髪は母親ゆずり、すこしの癖っ毛が入っているけど、ここは父親似かな。

瞳は黒く、何よりも全ての顔のパーツが完ぺきなまでに配置されていて、これを美少年と言わずして何を美少年というのか？ という勢いだ。

瞳には金色の筋が何本か瞳の中心から放射状に走っていて、初めて見たときは「病気か!？」と慌てたものだが、これについては精神力が高い印だと教えられた。

部屋で本を読んでいると、親父から声がかかった。

「アラン、剣を持って中庭に來い」

練習用の刃引きの剣を持ち、家の中庭に向かう。

「アラン、毎日100本の素振りはちゃんとやってるか？」

「はい、父上」

そう、実は言われていたのは素振り100本のみだったんだけど、特にやることもなかったから練習量を自分で増やしていた。神様にもらった能力じゃあ、自分は強化できないみたいだし、守られてばかりってのも男としてありえないでしょ。

中庭に到着すると親父は俺に向きなおすと、からかうように言葉を投げかけた。

「んじゃ、かかってきな」

side
ヤン

「え？」

アランは驚いて声をあげた。

無理もない、今まで素振りや型なんかは教えたが、俺が相手をしてやるのは初めてのことだ。

マリアや使用人から聞いた話だと、日課の素振りを欠かしていないみたいだが……さてさて、俺の自慢の息子はどれだけ成長してんだ？

まだ少し戸惑っているアランに声をかける。

「どうした？ 遠慮はいらんから、さっさとかかってこい」

「う、うん」

アランが踏み込み、上段から肩へ切りつけてくる。所詮子供の、しかも習いたての剣。なんて思っていたが、これはなかなか。力こそないが、その剣速には驚かされた。そこらの兵士なんかよりもよっぽど速い。

縦に横に振られる剣撃はどれも俺の剣で弾かれるが、それでもその速さは衰えない。

20回ほど剣撃を弾かれて、このままじゃ駄目だと思ったのか、アランは俺から離れて呼吸を整える。

目を閉じ深呼吸をすると、対峙する俺に向かって、未熟ながらも殺気を飛ばしてきやがる。

……いい目だ。

我が息子ながら惚れ惚れするほどの美少年ぶりだが、更に殺気を伴ったその姿はまるで伝説の魔剣のように妖しく、美しかった。

「――ふっ！」

アランの足が地を蹴り、今度は今までよりもさらに速く、俺の顔面

めがけて鋭い突きを放って来やがった。

さすがに背筋が冷えたね。ほんと。刃引きの剣でも普通に死ねるぞ？俺は咄嗟にかわして、自らの剣を首につきつけ、アランに負けを認識させる。

マリアから初歩の治癒術と結界術を習得したって聞いて、うちの息子はどんだけ天才なんだと有頂天になってしまったが、まさか剣でもここまでなんてな……。

手合わせを終え、さすがに少しは落ち込んだのかと気になったが、どうやら杞憂のようだった。

アランは自分の攻撃のどこに問題があったか、次はどこを鍛えればいいか、積極的に聞いてきやがった。天才の上に慢心がない。

マリアから勉強のことについても聞いていたが、アランは絶対に慢心することはなかった。

習ったことをそのままにせず、必ず自分で改めて見直しをし、知識を確実に自分のものにしていった。

アランと町を歩けば若い娘が寄ってくる。息子は恥ずかしそうにしているが、モテモテだ。

この間なんか団長の娘と初めて顔合わせしたんだが、普段からお転婆でわがままな娘が、顔を真っ赤にしてモジモジとおとなしくなっていた。

……くやしきなんかないぞ？俺にはマリアがいるんだからな。そ

う、くやしいわけがない。ほんとだぞ？

元は平民の俺が、手柄を立てて今じゃ近衛騎士団の副団長でその上子爵だ。

それもこれも、4年前の戦争の時に国王や大公の命を救ったつてのがでかい。

丁度アランが生まれてからだが、やけに体が軽く、技の切れが良くなったことを覚えている。

マリアもその頃から結界術に磨きがかかり、城の結界をほとんど担当するまでになっているが、二人で「親として護る物ができたせいだ」なんて話している。

それにしても、アランのあの瞳……まさか伝説の……？

……そんなわけねえか、王族じゃあるまいし。

4話 「森と湖」

4話 「森と湖」

父が近衛騎士、母が宮廷法術師ということもあり、俺の家はこの国の首都『ダオスタ』の中でも城に近い、町の中心地区に建っている。この辺りは比較的身分の高い人間の住む地域のように、貴族や神官など、裕福な者が多く住んでいるようだ。

ダオスタの都市はまるで玉葱のように城壁が4層になって作られている。

一番中心の城壁は国王などが住む城を囲っていて、その外側に貴族等の住む地域があり、それを2層目の城壁が囲んでいる。

3番目の城壁の内側には平民が暮らしているが、ここに住む平民は比較的裕福な者が多いようだ。

4層目の内側も同じく平民の為の地区だが、こちらは主に獣人や亜人など、特に西側は最下層と呼ばれる者たちの住居が並んでいる。治安も当然悪い。

この国では人間が権力の頂点に君臨していて、人間以外の獣人や亜人等は貴族になることはおろか、使用人等の公職につくことさえ不可能だ。

これは、人間が神に一番近い存在だと説いている神光教会の思想に基づいている。

神光教会にはいくつもの分派が存在しているが、この国で支持されているのが人間族至上主義の過激な教会だというのが一番の理由だろう。

教会の定めている人間は赤人、青人、黄人、白人、黒人の5つの人

種のみ。

混血の場合は特徴の強いほうの人種と区別されるらしい。

俺は誰が見ても黄人で、母も黄人。父は赤人。妹も赤毛だから、赤人になるのかな？

身体的な特徴でその人の性格がわかるみたいで、黒髪の人はおっとり。赤髪は情熱的で真っすぐ。青髪は無口だとか色々。これは血液型占いなんかと同じで結構適当っぽい。

さて、俺はというと、今はとある湖のほとりをお付きの使用人と共に散策している。

ダオスタへと続く、街道沿いの有名な景勝地のひとつとして数えられているこの湖は旅人の丁度いい休憩ポイントの為か、いつでも多くの人で賑わっていた。

街道にはいくつも露天のような商店が並び、食べ物や木彫りの像などの土産もの。中には水の精霊石なんてものも売られている。

貴重なものなのか母に聞いてみたが、こっそりと笑って「偽物よ」と囁くように教えてくれた。

本物をもっと感じられる力も強く、石に透明度がある上、そもそも値段が10倍以上も違うという。

宮廷法術師の母が言うんだから、間違いないだろう。

湖のほとりには石碑が建てられており、水の精霊をモチーフに彫られたその石碑は600年経った今でも美しい様相を保っていた。

ちなみにうちの両親達バカップルは……

「マリア、覚えているか？　あの夜の誓いを……」

「ええ、もちろんよ……ヤン」

と、人目も憚らずにいちやいちやしていたので、その場に置いてきた。

何でも、この湖のほとりで二人は婚約の誓いをしたとのことで、思
い出の場所らしい。

……果てしなくどうでもいい。

ただ、身内のひいきを抜きにしてもこの美男美女は絵になり、その
美しさ故に彼らの世界を邪魔するものはいなかった。

ある者はうっとり頬を染め、ある者は呆け、又ある者は絵筆を手
にし、必死で手を動かしている。……肖像画を描く人だろうか？
仕事はそっちのけだ。

妹は別のメイドが面倒を見ている。

こっちに付いて来たがついていたが、少し歩くし、のんびりと自然を
楽しみたかったので、お任せしてしまった。

「ミランダ、あれはなんていう鳥？」

「え？ ……えーと、アンタわかる？」

後ろにはうちで働いているミランダとその夫、ジュリオが続いている。

夫婦でレイナル家に働きに来ているこの二人は、俺を本当の子供のように接してくれている。

特にジュリオは元商人ということもあり、家の経理関係を全面的に任されている。

うちの両親はそういうの無理だろうし、ジュリオがいなきゃやばいんじゃないか？

元から細い目をさらに細めてジュリオは答える。

「ああ、あれは木目鳥ですね。羽の裏が木目のようになっているのが特徴ですよ。この辺ではあまり見ない鳥ですね」

「へー」

5歳の子供にも丁寧な口調で答えてくれる。

それにしても、前世でもあまり山とか森とか入ったことないし、こういうのもいいなあ。

湖の周囲は整備された森が広がっているが、ここからこの森を1キロも奥に行けば、人の手の入っていない危険な森が広がっている。そこは危険な魔獣や亜人達の住処となっており、ある程度腕に自信があるか、人数を揃える以外に入っていくものはいなかった。

手ごろな切り株に腰を下ろして頬を撫でる風を感じる。

そのまま、目を閉じ木々のざわめきや鳥の声に耳を澄ましていると、ふと何か気になる気配を感じた。

……とても強く、でも今にも消えてしまいそうな気配。

俺は無意識にその方向へ走り出していた。

5話 「ジュリオ」

5話 「ジュリオ」

side ジュリオ

私がレイナル家の使用人になったのは、雇い主であるヤン・ファー・レイナル様に命を救われたことにある。

先の戦争の際、私はある町に行商に行っていたが、なんの因果かその町が戦火に巻き込まれてしまったのだ。

そういった情報には常に気をつけていたつもりだったが、運が悪かったとしか言いようがない。

気がつけば私は何もわからないまま剣を持たされ、襲い掛かる敵と必死に戦っていた。

しかし所詮私のような素人にすら剣を持たせるような寄せ集めの即席軍隊。全滅するのは時間の問題だった。

共に肩を並べて戦っていた者が一人、また一人と倒れる中、私は必死に剣を振る。死にたくないという想いだけが私を支配していた。

しかし、幾人かの敵に傷をつけながら逃げ回っているうちにとうとう逃げ場が無くなってしまい、「ああ、私はここで死ぬのだ」と覚悟したとき、その男は現れた。

「あきらめるな！　もうすぐ援軍が来る！」

どこから現れたのか、私の目の前の男は敵を切り伏せる。
鬼神の如き強さとは正にああいうものを言うのだろう。

私が瞬きをする度に、彼が一回剣を振るごとに、目の前の敵が次々と倒れていく。

そして彼の言葉通り、援軍はすぐにやってきて、私たちは敵を追いつ返すことに成功した。

あのとき、彼があの場合に来てくれなかったら私は確実に命を落としていたことだろう。

彼がその援軍の一員であったことはすぐわかったが、彼は何故一人で切り込んで来たのだろうと不思議に思い、援軍の関係者に話を聞くと。

「本当は一緒に突撃するつもりだったんだが、武器の用意や隊組織を纏めるのに時間がかかってな……。あいつは「こんなことをやってるうちにあの町の奴らは死んじまう。悪いが先に行くから、後から追い付いてくれ！」と言って、一人先行したのさ」

私は絶句した。そしてそんな無謀な特攻が許されるものなのかと疑問に感じたが、彼の名前を聞いては納得するしかなかった。

『赤火のヤン』

この戦争での彼の逸話は多く、私も多くの話を耳にしていた。

曰く、100人の敵に囲まれ、全て返り討ちにした。
曰く、500人の兵隊に追われながらも、その殿を務めあげた。
曰く、武装したオークを一撃で屠った。

私はこれらの話を聞き、どれだけ武骨な大男なのだろうと想像したが、実際の彼はごく普通の青年にしか見えなかった。
……いや、普通というよりはかなりの二枚目である。

戦友たちと朗らかに笑いあっているその姿からは、あの鬼神の如き姿を想像することはできなかった。

その後戦争が一旦の終結を迎え、彼が国王から爵位を賜ったと聞いた。そして、同時に使用人を募集しているとも。

私はすぐに妻と二人でレイナル家の門を叩いたのだった。

……あのとき拾った命を、今度は彼の為に使おうと。

「……」

ふと気がつく、坊っちゃん、立ち上がって森の奥に意識を向けていた。

「坊っちゃん、どうしました？」

その声を掛けても私の言葉は届いていないようで坊っちゃんは曖昧な返事を返すだけだったのだが、一瞬意を決したような表情をするとまるで風のような速さでその方向へと走り出した。

「坊っちゃん!？」

慌てて引き留めようとするが、私の声は届いていない。

「私が追うから、お前はヤン様に報告しろ！」

妻は首を縦に振り、背を向けて走り出すと、私も坊っちゃんの後を追う。

しかし、整備されているとはいえ、森は森。立木や背の高い草が多く、すぐに私は坊っちゃんを見失ってしまった。

子供の足ではそう遠くは行かないだろうと考えていたが、あの坊っちゃんのことだ。

私は坊っちゃんの名前を呼びながら周囲を搜索すると、小さな木の根元で坊っちゃんがうずくまっているのを発見した。

私は全身から血の気が失せ、必死で駆け寄りながら大声で坊っちゃんを呼ぶ。

「坊っちゃん!!!!」

「……あ、ジュリオ」

坊っちゃんは何事もなかったかのように私に顔を向ける。

全身から力が抜けていくのを感じるが、今度は坊っちゃんのその手の先にあるものに目を奪われる。

そこには坊っちゃんと同じくらいの大きさの、体を横たわる狼の姿があった。

それは全身を真っ黒い毛皮で覆い、血のように赤い目を私をに向けている。

そのおぞましい外見に反して、寧猛さは感じられないが、その目からは威圧感のようなものが感じられた。

怪我をしているようで、良く見れば坊っちゃんのシャツにはそれのものと思われる赤い血液が広い範囲で付着している。

「これは、一体……?」

「こいつ、怪我していて死にそうだったから、治癒の法術をかけてあげてたんだ」

「……坊っちゃんが急に走り出したのは、この所為ですか?」

「うん、なんとなくだけど、助けてって声が聞こえた気がしたから」

「そう、ですか」

一体、この子には何が見え、何が聞こえているのだろうか？
5歳という年齢で法術を操り、英雄と呼ばれる男には剣の腕を認められ、誰にでも優しいこの天使のような子には……。

「それで、坊っちゃんはこの獣をどうするおつもりですか？」

私がそう聞くと、坊っちゃんは困ったような表情をして、言い辛そうにしている。
なんとなく、言いたいことはわかりますが……。

「坊っちゃん？」

「……家に連れて帰っちゃ、ダメかな？」

やっぱりそう来ましたか。

「……私がそれを許可するわけには参りません」

坊っちゃんの顔に悲しみの色が滲む。そう、私などが判断できることではありません。

「旦那様に聞いてみましようか」

私がそう言うと、一転して眩しい笑顔で私を見上げてくる。

「しかし、旦那様が駄目だと言われましたら諦めてくださいね」

「うん！」

気持ちの良い返事をする、坊っちゃんは今気がついたかのように自分の姿を確認する。

改めて見ると、血だらけのその姿はこの戦場で戦ってきたのか？というほどの有様だ。

坊っちゃんは少しはにかみながら、

「マチルダさん、許してくれるかな？」

と聞いてくる。

「さあ？ それは保障出来かねますね」

「そんなあ！？ ……しょうがない、お前も一緒に謝ってくれよ？」

坊っちゃんが狼に話かけると、まるでそれに答えるかのように「くるる……」と喉を鳴らすのだった。

この、誰よりも優しく、才能溢れる子はこの先どのように成長していくのだろうか？

私はそれが楽しみで仕方がない。

5話 「ジュリオ」(後書き)

このような駄文を読んいただきありがとうございます。
今後もしもできるだけ更新ペースを崩さずに投稿していきたいと
思います。

6話 「姉と狼と栗」

6話 「姉と狼と栗」

狼のラスが家に来てから一月が経った。

あの後、父に家に連れて帰ってもいいか聞くと、はじめは渋っていたのだが、母の一言でOKになった。

母の目から見て、ラスが自分たちに危害を加えることはないだろうということだが、やっぱり法術を扱える人ってのはそういうことを感じ取る力が強いんだろか。

ラスっていう名前は父が名付けた。名前に特に意味はないらしい。

聞いたら、「フィーリングだ！」と胸を張って答えられてしまった。

さすがに狼が家にいるってのはまずいから、対外的にラスは『犬』ってことになってる。

すっかりと元気になったラスだが、どうにも俺の知ってる犬とは趣が違う。

……おかしいな？ 俺の記憶では、犬は家の屋根に一発で飛び乗れるほどジャンプ力はなかったはずだよ？

背中に乗せてくれるのは嬉しいけど、体は同じくらいの大きさなのに、すごいスピードで走っちゃってる。

……これはやっぱりあれか？ 俺の能力が原因ですか？

なんとなく能力が使えないか試してみたら、普通に出来てしまった。そのせいか、いつの間にか能力レベルが2に上がっている。

能力レベル2は人種族以外の生物に対しての能力強化。能力の行使者に忠実であるほど、強化率は上がる。とのこと。

知能も少し上がってるみたいで、人間のことはも簡単な言葉なら理解できてるみたいだ。

今ならトップブリーダーも夢じゃない。

ラスはいつも俺と行動を共にしていた。

ご飯を食べるときも、勉強をするときも、剣の稽古をしているときも、夜寝るときも。

今日もラスのお腹を枕にしながら本を読んでいると、不意に不機嫌そうな声が聞こえてくる。

「ちょっとアラン、何よその犬？」

「あ、フラン姉ちゃん、どうしたの？」

近衛騎士団団長であるジョルジェット・カッティーニ侯爵。その娘

であるフランチェスカが、その整った顔を不満の色に染めて、こちらを睨んでいる。

腰あたりまである綺麗な金髪は少しウェーブしており、切れ長の目は少しつり上がっていて、気の強い印象を他者に与えている。

始めて会ったときは話しかけても逃げちゃうし、見た目によらず恥ずかしがり屋なのかと思ったけど、最近は大分話ができるようになっていた。

ちなみにフラン姉ちゃんは俺の3つ上で、身分も俺よりも上。

以前、目上の人だからと思って「フランチェスカ様」と呼んだのだが、フラン姉ちゃんから返ってきたのは拳骨だった。

生意気だからと言っていたが、他人行儀な態度が嫌だったのだろう。それ以来俺は「フラン姉ちゃん」と愛称で呼んでいる。

「どうしたの？　じゃないわよ！　折角私が遊びに来てあげてるのに、挨拶もないってどういうこと!？」

「でも、今日遊びに来るなんて聞いてなかったよ？　ジョルジェツト侯爵様が来るのは知ってたけど」

「何よ、私がお父様と一緒に来ちゃいけないってわけ!？」

そう、何故かいつも俺はフラン姉ちゃんを怒らせてしまう。……誰か、理由を知っていたら教えてくれ。

「そんなわけないよ、もちろんフラン姉ちゃんが遊びに来てくれて嬉しいよ」

「っ!？」　……そ、それなら別にいいのよ。……で、その犬は何よ

「？」

「ああ、ラスっていうんだ、可愛いでしょ？」

「ふーん」

フラン姉ちゃんがラスに近寄り、頭を撫でようと思ったのか手を出そうとするが「ぐるるるるる！！」と唸り声をあげ、ラスはフラン姉ちゃんを威嚇する。

さすがにびっくりしたのか、慌てて手を引っ込めるフラン姉ちゃん。

「ぜ、ぜんっぜん可愛くないじゃない！！」

「ちょ……、ラス、威嚇しないで」

「くーん」

注意すると、ラスはしょんぼりとした声を出し、耳を伏せる。
やっぱり可愛いと思うんだけどな。

「アラン、そんな大放っておいて、中庭のほうに行きましょう？
私おいしいお菓子持ってきたのよ」

「あ、うん」

そう立ち上がろうとすると、「行かないで」と言わんばかりにラスが俺の服の裾を啜えて放さない。

「大丈夫だよ、フラン姉ちゃんはああ見えて悪い人じゃないよ」

ちよつとだけ、怒りやすいけどね。と付け加えてラスを安心させると、名残惜しそうに裾を解放してくれる。

「それじゃ、行ってくるね」

中庭に着くと、カッティーニ家のメイドがお茶の用意をしている。フラン姉ちゃんは既に優雅に椅子に腰掛けていて「遅いわよ」と一言文句を言うが、その言葉とは裏腹にその表情は明るい。

「ごめん、フラン姉ちゃん。それで、今日はどんなお菓子を持ってきたくれたの？」

「フフン、今日は珍しい木の実を使ったお菓子よ」

そう自慢げに言い、メイドに目で合図を送るとそのお菓子が運ばれてくる。

「……………これって」

……………モンブラン？

「外国でとれるスリ……………？ とかいう木の実を使ったケーキよ」

「……………栗、じゃないかな？ 南のほうで取れるみたいだね」

自信無く言うフラン姉ちゃんに、思わずツツコミを入れてしまう。

「そ、そう、栗よ！　ちよつと間違えだけよ！　何よ、アランのくせに生意氣よ！」

「本で読んだんだよ。それに、食べるのは初めてだよ。ありがとう、フラン姉ちゃん」

モンブランなんて、前世でも食べたこと無かったなあ。

栗といえば、天津甘栗くらいしか食べたことなかった気がする。

思い出したら、ちよつと食べたくなってきた……。

「そ、そう。……まあいいわ、食べましょう」

「うん」

フラン姉ちゃんとモンブランを食す。

モンブランはちゃんと栗の味がして、とても甘くて美味しかった。

「そうそう、このス……、栗なんだけど、そのままでも甘くて美味しいわ」

「へえ」

「丁度それも持ってきてきてあるから、そっちも持ってきてさせるわね」

フラン姉ちゃんが合図をすると、またメイドさんが別の器を持ってくる。

その器に盛られているものは正しく天津甘栗そのものだった。

甘栗は皮が剥かれていない。

しかし、前世で天津甘栗の皮の剥き方を袋の裏のイラストで覚えた俺にとって、皮を剥くことなどなんてことはない。

栗の腹に爪で亀裂を入れ、両サイドを圧迫すると、パキッと小気味良い音を鳴らし、栗はそ中身を曝け出す。

程よい歯ごたえと自然な甘み。やっぱりうまい。

子供のように甘栗を手にとっては皮を剥いて食べる。……まあ、今の俺は子供なんだけどね？

ふと気がつくと、フラン姉ちゃんは栗を手にしながら、困惑したような表情でそれを見ている。

「食べないの？ おいしいよ？」

「む、剥くのに手が汚れるじゃない。私はいいから、アランが食べなさいよ」

そう言うのと拗ねたように横を向いてしまった。

あ……、剥き方がわからないのか？

「僕が剥いたのをあげるから、フラン姉ちゃんも食べなよ。甘くて美味しいよ？」

剥いた栗を自分の手に乗せ差し出すと、フラン姉ちゃんは横目でそれを見る。

「そ、そこまで言うのなら、食べてあげてもいいわ。……て、手が

汚れるから、食べさせてよね！」

「……え？」

「早く！」

フラン姉ちゃんは鳥の雛のように口を開け、栗を待つ。さすがに恥ずかしいのか、顔が真っ赤だ。

「じゃ、じゃあ、いくよ？」

いざ、その口に栗を入れようとしたその時、黒い影が栗を持つ俺の手に襲い掛かった。

ラスが横合いから栗を奪ったのだ。

いきなりの出来事に動きが止まっている俺とフラン姉ちゃんを尻目に、ラスは机の上にある残りの甘栗を貪り食う。

「この……バカ犬ううううう！！！！！！」

金縛りのとけたフラン姉ちゃんは机の上のラスに飛び掛ろうとするが、それをラスはヒラリとかわす。

「ま、待ちなさい！！！！」

中庭を駆け回るフラン姉ちゃんとラス。

フラン姉ちゃんが真っ赤な顔でラスを追いかけるが、からかうようにぎりぎりの速度で逃げるラスに一向に追いつくことは出来ない。

結局フラン姉ちゃんはラスに栗を奪われ、一つも口にすることはなかったのだった。

7話 「成長」

7話 「成長」

アランです。

月日が流れるのは早いもので、8歳になりました。

「お兄様、見てて、見てて〜！」

「ちゃんと見てるよ！ 落ちるなよ、フィアス！」

「は〜い！」

ラスの背中の上で元気よく返事をするフィアス。

「ラス、走って！」

「ワフ！」

フィアスが声をかけるとラスはそれに応え、走り出す。

「きゃー！ 速い速い！」

フィアスは5歳になった。最近は覚えた言葉を俺に教えようとしたり、描いた絵を見せてくれたり、母から教えてもらったのか、自慢の歌声を披露してくれたり、その一つ一つの行動が本当に可愛い。

今日もフィアスはラスの背中に乗せてもらい、嬉しい悲鳴をあげている。始めのうちは背中からずり落ちそうになったりしていてヒヤヒヤしっぱなしだったが、最近ではそれもなくなってきた。

実際に何度か落ちたこともあるんだけど、ラスはフィアスが落ちたと思った次の瞬間にはその口で服を咥えていて、フィアスがラスの背中から直接地面に落ちることはなかった。

そんなフィアスとラスを見ていて、最近ふと気がついたことがある。

なんというか、フィアスとラスの体の大きさの対比がおかしい。

俺が5歳のとき、俺とラスの体の大きさはほぼ同じくらいだったはずなんだけど、フィアスとラスでは明らかにラスのほうが大きい。

子供の身長なんて、男女でそう違いがあるはずがないし、やっぱりこれ、ラスが大きくなったとしか……。

どれくらいかというと、身長が約130センチの俺と目線が同じくらいになるくらい。目算だけど、全長2メートルくらいの大きさになっちゃってる。

アーモンド形の円らな瞳にふさふさでツヤツヤな毛皮。全身真っ黒だった毛皮は、耳の先っぽや足の先、尻尾の先が白くなっていて、これがまた可愛さに拍車をかけている。

たまにラスを見ては悲鳴を上げて逃げて行く人がいるが、失礼なやつらだ。

……でもまあ、ちょっと大きくなりすぎな気がしないでもない。一体どれだけ大きくなるんだろう？

俺は色々な本を読み漁って、ラスのような狼の記述はないか探したところ、とある冒険者の手記の中にそれらしいものを見つけたことが出来た。

『その魔獣は光り輝く真っ白な美しい毛皮を持った巨狼で、血のように赤いその目をナリアス河の対岸の我々に向けている。

その巨体は恐らく3ガット以上。その足元には3匹の小型の狼が川面に顔を近づけ水を飲んでいいる。子供だろうか？

小型と言ってもその大きさは既に普通の狼と同じくらいの大きさがあり、巨狼とは対象的な真っ黒い毛皮で全身を覆っている。

その白と黒の狼は水を飲み終わると静かに森の奥に去っていった。

』

1ガットっていうのはこの世界の単位で大体3メートルくらい。ということとは、その狼の大きさは10メートル近いことになる。

もしもラスがこの狼と同じ種類の魔獣だったら……？

これ以上大きくなったら、さすがに一緒には暮らせない気がする。

この世界で動物は大きく分けて獣と魔獣の2種類に分類されている。分類の基準とされているのは人で、人が狩ることが出来る動物を獣、人が狩るには困難な動物を魔獣と呼んでいるらしい。

魔獣の代表格としてはやはりドラゴン（竜種）が有名だろう。

また、魔獣は総じて知能が高いものが多く、中には魔法や言葉を使うものもいるという話だ。

ラスは……、多分、魔獣だろうなあ。
能力の影響があるとはいえ身体能力はありえないことになっているし、俺や母の法術を見ていた所為か結界のようなものを張ることもできるようになってしまっている。こんなラスを狩ることが出来る人間がいるとは思えなかったからだ。

……とりあえず、両親に相談してみよう。

「なるほど。アラン、お前の話はよくわかった」

そう言うと父は隣に座る母と目配せをする。

母が無言で頷くのを確認すると、父は少し目を閉じて一瞬だけ思考を巡らし、次のように宣言した。

「んじゃ、引っ越すか！」

「……はい!？」

つい、驚きの声をあげてしまう。

なんとなく、方法としてはそれが一番ベストだろうと考えてはいたんだけど、まさかこんなにあっさりとそれが出てくるとは思いませんでしたから。

「……大丈夫なの？」

これだけ自信満々で言い放つのだから、あてはあるんだろうけど、やっぱり心配だ。

そんな俺の不安な心を見透かしたかのように、母が優しく微笑みながら、俺に話しかける。

「大丈夫よ、アラン。実を言うとレイナル家には国王様からいただいた領地があるの。街から離れてしまうから少し不便にはなってしまうかもしれないけれど、森や山も多い土地と聞いています。ラスにとってもそのほうがいいのではないかしら」

領地があるなんて、初めて聞きましたよ、お母様？

「ま、今すぐという訳には行かないが、……そうだな、ひと月後くらいには引っ越せるんじゃないか？」

「でも……そんなにすぐ引っ越しちゃって、本当に大丈夫？ その、仕事とか」

そう、二人とも、一応はこの国の要職に就いているのだ。父はともかく、母の方はすぐに代わりが見つかると思えない。

しかし、この疑問についても母が説明してくれた。

実は、母が城で開発した全ての術式を教会の登録法術として神光教会法術管理局に登録してしまっていること。

現在城で運用されている術式については後輩の宮廷法術師に知識、技術面に於いて引継ぎを済ましてあること。

以上の理由から、母はいつでも宮廷法術師を辞めることができる、ということ。

神光教会法術管理局とは、前世に於ける特許庁と同じようなもので、神光教会の信者であることが絶対条件ではあるが、料金さえ支払えば基本的に誰でも教会が管理する術式を知ることができるようになっている。

ただし、管理局が管理する術式は公式法術と非公式法術とに分けられており、公式法術は一般人への公開が許されているが、非公式法術はある程度の権力や地位がなければその閲覧はおろか、その品目すら閲覧することは不可能だ。

母の登録した結界術は非公式法術の指定を受けたらしい。城や神殿などのセキュリティに直接関わる技術だし、当然といえば当然か？また、術式の開発提供者は教会の功績者として認められ、その術式の使用料金を一定期間貰うことが出来る。

ちなみに、『法術』というのは教会や国が管理している術のことを言い、管理されていないものは単に『術』と呼ばれる。

また、それとは別に『魔法』『魔術』と呼ばれるものも存在するが、原理は法術と全く同じで、基本的には術式が多少違うだけだ。

亜人や獣人が使う術は異端として、まとめて魔法、魔術などと呼んでいる場合が多い。

「とうわけで、引越しは元々考えていたことでもあったし、お前は
何も心配するな」

「そうよ？ お父様とお母様にまかせておきなさい」

両親の言葉に俺は安心を覚える。

かくして、レイナル家一家はダオスタの街から引っ越すことになったのだった。

8話 「カッティーニ家の思い 1」

8話 「カッティーニ家の思い 1」

Side ジョルジェット

全くもって、急な知らせだった。

珍しくヤンのやつが「頼みごとがある」と言ってきたと思ったら。

引越しをするから、近衛騎士団を辞める……だと？ いきなり何を言っているのだ！？ こいつは！？

貴様は栄えあるダオスタ王国近衛騎士団の副団長だろうがっ！！

私は心の内の怒りを押し殺して、理由を訊ねる。

「……それで？ 何故いきなり引越しなのだ？ それに、別に騎士団を辞める必要はないのではないか？」

「いや、実はな」

バリバリと頭を掻きながら、ヤンは言葉が続ける。

「アランが拾ってきたあの狼なんだが、とんでもなく大きくなっちゃまってさ、もっと広いところに住もうかと思って。ハハハ」

そんな、犬がでかいからと、そんな理由で………！ ……ん？
今、こいつはなんと言った？

……おおかみ……だと？

「あ、あれは犬だと言っていたではないか！？」

おかしいとは思っていた。このような犬がいるだろうか。しかし
マリア殿にまであれは犬だと言われてしまえば、それを認めざるを
得なかった。

私が叱責してもヤンは「悪い悪い。まあ、いいじゃねえか、どうせ
引越すんだし」と笑うばかり。

怒りを通り越して呆れる私に言葉を続けるヤン。

「それに、ダオスタから離ればあの鬱陶しい社交界ってのとも縁
が切れるだろうし、いいことづくめだ。だろ？」

「お前にとっては、だろう？ ……そういえば、お前は社交界が嫌
いだっただな」

「そりゃそうだろ。腹の中で何を企んでるかわからないような親父
どもと話して何が楽しいんだ？ 話し方も回りくどくて結局何が言
いたいかわかんねえし、派手な女どもは遠目にジロジロと見てくる
だけで感じ悪いしよ」

「まあ、そう言ってくれるな。私だってその社交界の一員なんだ。

平民出のお前が珍しいのさ、きっと」

「ジェットみたいなやつばかりだったら、俺も嫌いになんてならないさ。……それにな」

ヤンは少しばつの悪そうな顔をする。

「お前に誘われて騎士団に入っただけいいんだけど、城の中で要人の警護ばかりつてのも性に合わねえんだよな。それに丁度俺がもらった領地って、あの『原初の森』と『終焉の山』に面してるんだろ？　そこに行ってみたいってのもあるんだよ」

『原初の森』に『終焉の山』は我が国、いや、この大陸における魔境の代名詞のような場所だ。

我が国の東、大陸の中央に位置しているこの深い森と山々はその国、土地、種族によって呼び名が異なる。

森のほうは『暗黒の樹海』『神代の森』『魔獣の棲む森』、山々は『怒りの山』『神の頂』『竜の山』などと様々な呼び名が存在し、伝説や言い伝えでは古代文明の遺跡や魔王の住む城、地の底まで続くような洞窟があり、そこには多くの魔道具や、神話の中で登場する聖剣などの宝が存在するといわれている。

それ故に過去幾度となく冒険者や軍の調査隊が派遣されてはいるが、その広大さと多くの危険故に人が把握しているのはごく僅かな森の入り口部分のみに過ぎなかった。

レイナル家が国王より賜ったのは、そういう土地だ。

その深い森があるお陰で隣国のドウルアーン帝国の侵略を防いでいるという側面もあるのだが、あの土地は正に陸の孤島。まともな人の住む場所ではない。

先の戦争で平民のから貴族にの成り上がったヤンはこの国の旧来からの貴族には疎まれている。

レイナル家に対する心持ちは「平民の分際で」といったもので、どの貴族も大抵同じようなものをレイナル家に対して持っていることだろう。

戦争というものは良くも悪くも国を変化させる。

先の戦争のように国の命運をかけたような大規模なものであればあるほど、それは顕著なものとなり、戦争の最中で武勲をたてて新しく貴族に成り上がるものがある一方、戦争の中、当主や跡取りを亡くして没落していった貴族も少なくは無かった。

子爵というその称号ゆえに領地を与えないのはおかしい、かといって肥沃で実入りが良い土地を与えては他の貴族の顰蹙を買う。

苦渋の決断の結果、国王は彼の土地をレイナル家に与えたのだった。

厄介払いに押し付けられたと見て間違いないその土地は山と山に囲まれた盆地に僅かな村が点在してはいるが、痩せた大地には大した作物も育たたず、その土地の場所柄故に冒険者が時として補給基地として利用することもあるが、森や山に入って無事に帰還することのできる程の有能な冒険者は数えるほどしか存在しない為、人の出入りも期待できない。

過去にもあの土地を任された貴族はいたが、その土地の実入りの悪さに加えて魔獣の襲撃や天候不順などが重なり、没落していくのが常だった。

「あの土地はお前が考えているほど甘い土地ではないぞ。……それに、お前はそれでいいのかも知れないが他の家族はどうなのだ？ アランは？ フィアスは？ それにマリア殿は宮廷法術師だ、そうそう簡単に辞められるものでもないだろう？」

「んゝ、そもそもこれを言い出したのはマリアなんだよ。アランはラスと離れたくはないようだし、フィアスもラスに懐いているから離れさせるのは可愛そうだ。ちなみにマリアはいつでも宮廷法術師をやめる準備は整っているぞ」

「……マリア殿が？　そうか……」

「ジェットには世話になりっぱなしでほんとスマンが……、頼む！　俺を行かせてくれ！」

そう言うと言は頭を深く下げる。……本当に仕方の無い奴だ。

私は深くため息をつく。

「わかった……。そこまで言うのなら仕方あるまい。お前の副団長の任を解こう」

私の言葉にヤンが顔を上げる。

「ただし、近衛騎士団を辞めることは無理だ。この国最強の騎士を手放すわけにはいかない。お前がいない間は副団長代理に頑張ってもらうことにして、副団長の席はお前が戻るまで空席とさせてもらう。……それでいいな？」

「わかった。それで十分だ。ありがとう、ジェット」

「お前の無茶な行動には、慣れているつもりだよ」

大げさに方を竦めて苦笑する私につられてヤンの顔にも笑顔が戻る。

「んじゃ、今日はこれで失礼するよ」

「こちらのことは任せておけ。もし何か面白いものを見つけたら教えてくれよ?」

「ハハハ、見つかったらな。……あ、そうそう」

そう言うとヤンは自分の手荷物からゴソゴソと何かを探している。

「お、あった」

「どうした?」

訝しげな目で見る私に、ヤンが手荷物から探し出した小さな包みを差し出す。

「これ、マリアからなんだが、クッキーを焼いたから娘さんどうぞ。だってよ」

「マ、マリア殿が私に!?!」

「最初に渡せばよかったんだが、ほら」

そう言って、ヤンは動きの止まった私に無理やり包みを持たせると「それじゃあな」と、踵を返して部屋から去っていった。

マ、マリア殿が、焼いた、クッキー……だど？

私の脳裏にある夏の日の悪夢がよみがえる。

あれはそう、とある戦で私が負傷したとき、野戦病院の施設でまだ見習い法術師だったマリア殿に初めて会ったときの話だ。

私は左の二の腕と右の太ももに矢傷を負ってしまつて野戦病院のテントに運び込まれた。

幸い大した怪我でもなかった為、矢を抜いてからテントの中で暫く安静にしていた私だったが、その私の前に女神が現れた。

彼女は後方支援部隊医療班の制服を着用しており、部隊の一員であることを証明している。

少し幼さが残る顔立ちは美しく、その黒い瞳は優しさに満ちており、薄い黄色の肌と美しい黒髪は彼女が黄人であることを私に教えてくれる。

額には玉のような汗が浮かんでいて、彼女は包帯を替えたり、食事の介助をするなど、必死に自分の任務を全うしているのが少し離れた場所で横になっている私にもわかるほどだった。

あれだけの美しさだ。介抱を受けている兵達はどれほどの夢見心地であろうかと羨ましく思ったものだが、兵達を見ているとどうにも様子がおかしい。

兵達は何故か一様に彼女を恐れているのだ。その理由がわからず首を傾げる私だったが、すぐにその理由を知ることになった。

私の彼女による食事介助の順番がまわってきて、期待と共に喜色満面で彼女を迎える私だったが、すぐにその顔が曇ることとなる。なんととも言えない匂いが、彼女の持つ器から漂ってきたからだ。

なんだこの臭いは！？ ……心なしか、目も痛い……！？

美しい女性と私が口にするであろう、異臭のする液体……。この異様な組み合わせに私は戸惑うことしかできなかった。

彼女はマリアと名乗り、私の食事介助をすることを告げると、その器の中身をスプーンで掬う。

「フー、フー」とそれを息で冷まし、「はい、どうぞ」と手ずからそれを勧めてくる。この状況だけを見たのなら私も天にも昇る心持ちになっていただろうが、私の意識は異臭の元に向けられており、それどころではなかった。

これは……食えるのか？

なかなか口を開かない私の視線に気付いたマリア殿は「ああ、これは私の特製スープで、色んな葉草を配合してあるんです。ちょっと匂いますけど体にいいんですよ？ 食べた人はすぐに元気になって、ここを出て行くんです」と、その説明を行う。

……これを食べたくないから、無理やり元気に見せかけているのではないか？

恐らくこれが真実だろう。そんな考えが頭の中に浮かぶが、それを口に出すようなことはしない。

私のそんな胸中の思いをよそに「これを食べないと、元気になりま

せんよ」とマリア殿は困ったような顔でスプーンを私の口に向けてくる。

くっ！　いたしかたない！

口をあけるのを躊躇う私だったが、意を決してそれを迎え入れる為、口を大きくあける。

それを見て顔をほころばせる彼女はまるで天使のように美しいが、しかし手に持つそれは毒薬と等しいものに見え、私は冷や汗が止まらない。

口に入れられた瞬間の衝撃は今も忘れない。

最初に感じたのは頭まで融けるような甘み。そして次に来たのはすさまじい辛み。後味はこれでもかというほどに苦く、食管はザリザリとしていて飲み込むことも困難な代物だった。

目を白黒とさせながらも必死で飲み込む私を確認すると、すぐさま同じ手つきでスプーンを掬い、「はい、まだまだありますからね」と天使のような笑顔でそれを私の口に運ぼうとするマリア殿。

その光景だけを見れば誰もが羨む状況に違いなかったであろうが、私は気力だけでそれを食し、食べ終わる頃には全ての力を使い果たしてしまい、すぐさま意識を失ってしまったのだった。

余談ではあるが、このマリア殿特製スープをわざわざテントまでもらに行っている者が一人だけ存在していた。

この赤髪の青年が後に私の親友とも言える存在になるとは知る由も無かった私であった。

そして今、私はマリア殿のお手製クッキーを前にして、精神を集中している。

水の準備……よし！

菓の準備……よし！

クッキーを一つ手に取ると、ジワリと額に汗がにじむ。

心の準備……よし！

頬を一筋の汗が流れ、唾をゴクリと飲み込む。

私は意を決してクッキーを一口に放り込むと、それを恐る恐る噛み砕く。

程よい硬さのクッキーがサクッと口の中で崩れ、香ばしい甘い香りと共に控えめな甘みが口の中に広がった。

「……うまい」

……これは本当にマリア殿が焼いたのか？ ……あの、味音痴なマリア殿が？

実はヤンとマリア殿が結婚してからすぐ、マリア殿の手料理を食べさせてもらったことがあったのだが、それはそれは辛い食事だった。ヤンは何も感じないのかバクバクとそれらを平らげていたが、その独特の味のオンパレードに私は涙をこらえて耐えるしかなかったのだ。

……マリア殿、法術だけではなく、料理の腕も上達したのだな……。

私が感動していると、廊下を走る足音が近づいてくる。

勢いよく開かれる扉の向こうには息を切らした娘。

「お父様！！ どういうことですか！？」

こうして私はひと時の感動から現実に戻されるのだった。

9話 「カッティーニ家の思い 2」

9話 「カッティーニ家の思い 2」

side フランチェスカ

「アランが引越すですって!？」

メイドからその話を聞いた私は、慌ててお父様の元に向かった。

屋敷の廊下を全力で走り、階段を上る。

今着ている布をたっぷりと使ったドレスは気に入っていて今度アランにも見せに行こうと思っていたけど、今は重くて鬱陶しいだけ。

「お嬢様! 屋敷の中を走るなんて、はしたない!」

メイド長のオデットが注意してくるけど、止まるなんて無理!

階段を上がって、廊下の角を曲がって3番目のドアを目指す。そこがお父様のお部屋。

ドアの前で立ち止まると、息を整えるのもノックをするのも忘れて、勢いよくドアを開け放す。

バンッ! とドアの音が響き、ドアが開ききると同時に私は叫んでいた。

「お父様!! どういうことですか!?!」

お父様は何故かクッキーを前に呆けたような表情をしていたけど、少し間を置いて私に言葉を返す。

「あ、ああ、どうした? フラン」

「どうした? じゃありません! どういうことですか!?! アラ
ンが引っ越したなんて!」

お父様は少し目を見開いて驚いたような表情をすると、「もう、お
前の耳に入ってしまったのか」とため息をつく。

「聞いた通りだ。レイナル家はダオスタを出て、レイナル領に移り
住むことになった」

嘘であって欲しい。そう思っていたのに、それを認めてしまうお父
様。

「っ!?! ……いつですか!?!」

「来月の頭頃だ。それ以後のことは聞いていないが、しばらくはこ
ちらに帰って来ないだろう」

「そんな!?! 急すぎます!」

「私もそう思うが、もう既に決まったことだ。それに、私が何を言
ってもあいつの気持ちは変わらないよ」

「……………！」

なら、私が直接アランのお父様にお願いすれば、引越しを止められるかも……………！」

私はそう思いついて今すぐにレイナル家に向かいたくて部屋を出ようとするけど、お父様に手を掴まれてしまう。

「放してください、お父様！」

「フラン、どこに行くつもりだ？」

「…………レイナル家に」

「今日はヤーデルード侯爵家の晩餐会に招待されているのを忘れたのか？ それに今日はご子息のお披露目を兼ねている。お前の勝手なわがまままで参加を取りやめることはできない」

「…………っ！」

「…………フラン、父を困らせないでくれ」

お父様の言葉に何も言えなくなってしまった私は、晩餐会の準備をして、ヤーデルード家へ向かうことになってしまった。

ヤーデルード家での晩餐会では、最初に10歳になったばかりのヒルボリ・ヤーデルード侯爵子息のお披露目がされ、彼が自己紹介を

行った後の会場は歓談の場となった。

ヒルボリ侯爵子息は私と同じ金髪で白い肌をした子供だった。でも、オークのように丸々と太った体に仕立てだけは良い燕尾服の不恰好な組み合わせは、私にとって嫌悪の象徴にしかならなかった。

……何を着ても絵になるアランとは大違いね。

お父様と共に挨拶をしに行くと、ヒルボリ侯爵子息が私に話しかけてくる。

私はそいつと話すのが苦痛で仕方なかったけど、お父様や周りの貴族達の手前、仕方なくヒルボリの話に耳を傾けた。

……本当に、来なければ良かった。

数分後、私は心の底からそう思った。

「ハハハ！ 英雄と言ったって、所詮は平民出の野蛮な人殺しじゃないか。どうせ、その子供達も同じで、獣人のように野蛮なのだろう？ そんなレイナル家が僕のように社交界に出て来れるはずがないじゃないか」

どういう話の流れでこんな話になったのかは覚えていないけど、ヒルボリの口からレイナル家の悪口が何度も飛び出す。

私はそれを聞きたび、そのうるさい口の中に石を思いっきり詰め込んでやりたいと考えてしまう。

でも、そんなことをしたらどうなるかなんて、私にもわかってる。

アランといると楽しかった。アランといると笑うことができた。アランといると怒ることが出来た。アランといると、私は私でいられた。カッティ―ニ侯爵令嬢じゃなく、「フラン姉ちゃん」でいられた。

こんなやつに、アランの何がわかるの！？ アランのお父様、お母様の何がわかるの！？

必死に耐えるしかない私だったけど、このときは本当に怒りで頭がおかしくなるかと思った。

本当に、一発くらい殴っておけばよかった！

翌日、今日こそはアランの家に行こうとしたけど、今日から別荘に行くことになっているのをすっかり忘れていた私はまたお父様にかまってしまう。

向こうでの滞在は2週間。別荘への滞在は毎年の楽しみになっていたはずなのに、今年はそこの全てが色を無くした様に感じた。

小川をボートで下っても、林の中を馬で散歩しても、仲のいい子とお茶会をしても、おいしいお菓子を食べても、何も心に沸いてくるものがなかった。

どこに居てもすぐにダオスタへと帰りたくなってしまふ。今までこんなことはなかったのに……。

別荘での滞在が終わってダオスタに帰れたと思ったら、またお茶会、晚餐会、訪問と色んな予定が続いて、結局アランの家に行くことが

できたのは、引越しのことを耳にしてから3週間も経ってからだった。

アランの家に着いた私の目に入ってきたのは、レイナル家の屋敷に出入りする沢山の業者の姿。

大量の武器や食料と傭兵の姿まであるその様子は物々しくて、引越しというよりも、まるで魔獣退治にでも行くみたいに見えた。

私はレイナル家の使用人をつかまえて、なんでこんなにも武器や食料、傭兵まで必要なのか尋ねる。

「引越しにあたって、危険なチョーティの谷やシヴの森を抜けないといけませんので、その準備です。出発は明日になりますので、このような状態となっております」

その中年の男性の使用人は聞かれたことに対して正確に自分の持っている情報を述べると、すぐに自分の仕事に戻っていった。

レイナル領が危険な場所だっというのは、お父様に聞いていたからそれについては驚くことはない。でも最後の言葉だけは無視することとはできない。

出発は明日になる？ 明日ってあした？ だって、出発は1ヵ月後って……？

頭がこんがらがったまま歩いていると、私はいつの間にかアランの

家の中庭に来ていた。すると「あれ？ フラン姉ちゃん？」と私を呼ぶ声が聞こえた。

私のことをそんな風に呼ぶのは一人しか居ない。

「……アラン？」

私が振り返ると、そこには少し驚いた様子のアランの姿がそこにあった。

すごい美少年だけど、お人好しで優しくて放っておけない、私を本当の姉のように慕ってくれてる、弟みたいな男の子。

「どうしたの？ いきなり」

「どうしたの？ ですって？ ……そんなの、あんたがいきなり引っ越すなんて聞いたから、それを止めに来たに決まってるじゃない！ しかも何？ 明日出発ですって？ 話が違うじゃない！」

私の勢いに飲まれたのか、アランは一言も喋らない。私はさらに言葉が続ける。

「私がせっかく色んな予定をこなしてやっと会いに来てあげたのに、何よ、明日いなくなる？ ふん！ どうせ、すぐに帰ってくるんじゃない？ 私を驚かそうっていったって、そうはいかないんだから！」

文句とも、私の願望ともとれるような言葉を一方的にアランにぶつける。

「……何よ、何か言いなさいよ」

「ごめん、フラン姉ちゃん。いつ帰ってくるかはわからない」

アランは真っ直ぐに私の目を見つめて、口を開く。

「この家は残しておくんでしょ？　そ、それならいつでも帰ってこれるじゃない？」

「この家は手放すんだよ。もう、明後日には別の人の持ち物になっていると思う」

「そ、それなら、私の家に住めばいいのよ！　そうすれば……！」

無茶なことばかり言っているのはわかってるけど、私の勢いは止まらない。

「そうよ、そうすれば私の家の使用人もいるし、なににも不自由はないわ！　あのバカ犬も飼えるわよ！　それに……」

「……それは無理だよ、フラン姉ちゃん」

「……なんでよっ……！」

悲鳴にも近い声で私は叫ぶ。

ヤダ！　ヤダ！　認めたくない！　認めたくない！　アランが私の前からいなくなるなんて絶対認めたくない！

胸が張り裂けるような思いで、気がつけば目の前は涙で大きく歪んで見える。

涙は頬を伝って足元に落ち、雨も降っていないのに、そこだけ小さな染みをつくっていた。

私はとても立っていることができなくて、力無くその場に座り込んでしまう。

涙が止まらない私は、目の前にアランがいるのも忘れて嗚咽をもらす。

すると、アランは泣きじゃくる私に無言で近づくと、優しく私の頭を抱きしめてくれた。

アランの胸に抱かれる私。トクンッ……トクンッ……と彼の胸の鼓動を感じていると、不思議と私の心は落ち着いていった。

どれくらいの間、そうしていたんだろう？ 嗚咽が出なくなった私にアランが優しい声で話しかける。

「大丈夫。もう二度と会えないわけじゃないよ。いつか俺が大きくなったら、絶対にフラン姉ちゃんに会いに来るから、それまで待って欲しい」

「……わかったわよ……。……何よ、アランのくせに生意気よ……」

アランの優しい拘束を解いて、私は涙を拭く。

「でも、あんまり会いに来ないようだったら、承知しないんだからね！」

私がそう言い放つと、「了解」といつもの笑顔で返してくれるア
ンだった。

夜が明けた。

……アラン達が出発する日。

私は見送りには行かなかった。行けば、きっとまた昨日のように泣
いてしまうから。

珍しくメイドに起こされるでもなく、日が昇ったばかりの時間に目
を覚ました私はベッドの中で考えていた。

手の中には、昨日アランがくれた美しい藍色のリボン。

いつ帰ってくるかわからないなら、私が会いに行けばいい。
会いに行くのに危ない道を通らなきゃいけないなら、剣術を習って
強くなればいい。

私の決心は固まった！

居ても経っても居られなくて、寝巻きのまま自分の部屋を飛び出して、屋敷の中を駆ける。

階段を上がってから廊下を曲がって、3番目のドア。

ドアの前で立ち止まると、息を整えるのもノックをするのも忘れて、勢いよくドアを開け放す。

バンッ！ とドアの音が響き、ドアが開ききると同時に私は叫んでいた。

「お父様！ 私に剣術を教えてください！」

10話 「引越し 1」

10話 「引越し 1」

ダオスタを早朝に出発して、時間は今丁度お昼に差し掛かったあたりだろうか？

出発して暫くの間は麦畑や果樹園などが広がっていたが、今は延々と何もない草原が広がっている。

「いやあ、ちょっとお腹がすいてきたね」

荷馬車の御者台に座っている俺の隣で手綱をにぎり、そう話しかけてくるのはセアドさんという若い兵隊さんで、まだ少年の面影を残したその端正な顔立ちに人のよさそうな笑顔を浮かべている。

セアドさんは元々父の部下だったらしいけど、今回わざわざ近衛騎士団を辞めてまでレイナル家に着いて来てくれた人の一人だ。

レイナル家の引越し隊は3台の馬車と10騎の騎馬で構成されている。

母と妹、そしてミランダさんが乗る先頭の馬車の御者台にはジュリオが座って手綱をにぎり、その隣には父が座っている。

2頭の馬が引く、少し高級チックな屋根付きの4輪の馬車は、馬も含めてジョルジュット侯爵からの餞別ということで譲り受けたものだそうだ。

その後ろには荷馬車2台が続いていて、真ん中の荷馬車の御者台に俺とセアドさんが肩を並べて座っている。

そして3台の馬車を取り囲むように傭兵達がレイナル家の護衛をしているわけだけど、この傭兵達、威圧感が半端ない。

なんというか、張り詰めた雰囲気常を纏って、周囲に殺気を飛ばしまくっている。

彼らにとっては仕事だし、真面目にやっているということで評価はできるんだろうけど、もうちょっと肩の力を抜いてもいいんじゃないかな？

そのせいでフィアスは怖がって馬車から出れないでいるし、話しかけづらいことこの上ない。

傭兵のリーダーを務めるのはヴィルホという大柄で熊のような外見の中年の大男で、その顔や体についた無数の傷跡は彼が潜ってきた修羅場の数を物語っている。

父の昔の知り合いだそうで、さっきから何度も軽口をたたき合っている、
「ガハハハ！」と豪快な笑い声をあげている。

遠くからその様子を眺めていたけど、豪快に笑うその姿は愛嬌があってとても親しみやすそうだと俺は感じていた。

そのでっかい手でグリグリと頭を撫でられた時は大変だったけど……。

昼食は皆、馬車や馬上で移動しながら食べる。

セアドさんと俺も、自分に配られたサンドイッチのようなものを口に頬張っている。

「そういえば、セアドさんはなんで騎士団を辞めてまで父についてきてくれたんですか？」

セアドさんは水を一口含むと俺に向き直って話し出す。

「なんでって、僕はそもそもヤン様に憧れて騎士団に入団したんだ。そのヤン様がいなくなる騎士団なら、僕はそこにいる意味がない。付いて行かないなんてありえないよ！」

心なしかセアドさんの鼻息が荒い。

「うーん、うちの父って、そんなにすごいんですか？」

今度は目を丸くして、信じられないようなものを見るような目をして俺を見るセアドさん。

「あ、当たり前じゃないか！ ヤン様は救国の英雄って呼ばれているんだよ？ ヤン様の戦場での活躍はまさに一騎当千！ 平民出であるにも関わらず、この国最強の騎士にして最強の剣士！ そんなヤン様に憧れない男なんて、この国には存在しないよ！」

「そ、そうなんですか」

「そうだよ！ そもそも――」

……それからはセアドさんの『赤火のヤン』講義が延々と続くことになった。

もともと父はあまり自分のことを話したりはしないから、他の人からそういう話を聞くのは新鮮だったんだけど、客観的に聞く父の話はそれはすごいものだった。

セアドさんのフィルターがかかっているとはいえ、何？ その超人っぷりは？ と呆れる話の連続。

敵に襲われている町を一人で救ったとか。突撃してくる騎馬100騎を一人で足止めしたとか。飛来する無数の矢を全て避けたとか。敵側の結界術を気合いで破ったとか。中には水の上を走って渡ったとか、火に焼かれても死なないだとか、それはもう人間の域じゃないだろ……。と思ってしまうような話も多数含まれていた。

実はセアドさんのようにレイナル家についていきたいと言い出した国軍所属の兵は思ったよりも多かったようで、志願者による厳正なる勝負の結果、見事セアドさんはそれをもぎ取ったらしい。セアドさんと同じようにレイナル家について来た人はセアドさんを含めて全部で3人。残りの二人は一番後ろの荷馬車で手綱を握っている。

話は傭兵達の話に戻るんだけど、傭兵達の中でもひと際目を引く、全身をマントとターバンで覆っている傭兵がいる。

ダーニャと名乗ったその傭兵は声や仕草から女性ということはあるんだけど、その目もとしか見えない格好はまるでイスラム圏の女性のように、瞳以外の外見的特徴を何も伝えてはくれない。

しかも何故かこのダーニャさんに俺は避けられているようで、話かけても一言二言しか返してくれなかった。

他の傭兵達は見た目は怖いけど、話しかければちゃんと答えてくれる。

ただ、傭兵達はみんな俺を呼ぶときに「若！」って呼んでくるんだが、これはどうにかならないものか……。

ダーニャさんの瞳には他者を寄せ付けまいとする強い意志が宿って

いて、傭兵達の間でもかなり浮く存在になっていた。

でも、何故かダーニャさんの視線を感じることが多い。ふと気がつくと思ったりするし。

それは俺にだけではなく、特に父に向けられていることが多いように思えるんだけど、気のせいではないと思う。

一日目、二日目は平地での移動だった為、特にこれといったことは起きなかった。

強いて言えば、空が青くて夕日が綺麗だったことぐらいかな？

たまにすれ違う商人や旅人もいたんだけど、例外なく鋭い視線と殺氣を向ける傭兵達のお陰で、みんな下を向いて目線を合わせないようにすれ違うので、旅路での出会いというのは全くと言っていいほど期待できなかった。

ダオスタを出発して二日。その日の夕方、ニジェの町に到着するこ
とができた。

ここから先はもうレイナル領まで町は存在しないので、レイナル領
から一番近い町がこのニジェの町ということになる。

ちなみに、この町にはなんと温泉が湧いているらしい！

体が小さいうちは湯浴みの桶に溜められたお湯で全身浸かることが
できたんだけど、さすがに最近では体が大きくなってしまって、少々
窮屈さを感じているところだった。

折角なんだから、入りたいよね、温泉。

はじめはみんなで野宿の予定だったんだけど、ジュリオの提案でレイナル家は町の宿に泊まり、傭兵達は町の郊外に野宿することになった。

宿はもちろん露天風呂付！ 温泉に入りたいと言い続けた甲斐があった。

ジュリオが宿と交渉してくれたみたいで、傭兵の皆さんも交代で露天風呂に入れることになったみたいだ。

俺はできるだけ露天風呂に入ることができるように、色んな人と一緒にいった。

父と母と妹と一緒に一回。

露天風呂は混浴でしたよ……。

ジュリオ、ヴィルホさんと一回。

セアドさん達と一回。

ラスとも一緒に入りたかったんだけど、獣は入っちゃだめらしい。

……残念。

こっちの世界では生まれて初めて温泉に入ったわけだけど、多分みんなの記憶には『温泉が大好きなアラン少年』と刻み込まれたに違いない。

11話 「引越し 2」

11話 「引越し 2」

朝、まだ日が出ていない早朝に起きて、俺は一人で朝風呂を満喫していた。

どんだけ温泉好きなんだよ!? と、自分でも思うけど、これから先温泉に入れる機会があるかわからないし、十分に堪能しておきたかったのだ。

朝風呂最高!

軽く泳いだり、木々のざわめきや鳥の声を聞きながら露天風呂を楽しんでいると、俺は脱衣所から物音がするのに気がついた。

衣服を脱いだり、物を置く音から、誰かが温泉に入りに来たことが分かる。

誰だ?

俺が脱衣所のほうを注視していると、その人は衣服を脱ぎ終わって湯に入る準備ができたのか、そのまま浴場に入ってきた。

白んだ空と湯気のせいではっきりとは確認できないが、滑らかな曲線を描くシルエットと胸部の膨らみ。その人が女性だということに気がつくのに時間はかからなかった。

やばいぞ!？ 向こうはこっちに気が付いていない!？

いや、今の俺は子供だからOKか!？

いやいやいや、関係ないだろう!

俺がそんなことを考えてあせっているうちに、女性は既に湯の中に入って肩まで湯につかりながら、「ふふ……」と気持ちよさそうな声を出している。

顔がこちらの方に向いているが、こんな時間に誰も入っていないだろうという先入観に捉われているのか、全く俺の存在に気がついていない。

「ふふ……、久しぶりの温泉だニヤ……」

どうしよう……。いきなり声をかけるのも変だよなあ。

俺がなんて声をかければいいか迷っていると突然一陣の風が吹き、視界を遮っている湯気を吹き飛ばしてしまった。

晴れた視界の先には一人の女性。

「……!？」

「……!？」

その女性は両手を組んで上に伸びをするような体勢のままで固まってしまっている。まさかこんな時間に先客がいるとは思ってもみなかったのだろう。

胸にある膨らみもその体勢では丸見えだったが、俺の目は別の部分

に釘付けになってしまっていた。

ね、猫耳????

そう、猫耳のついた妙齡の美女がそこにはいた。

年は20前後。肩まで伸ばしている髪の毛は綺麗な淡いココアのような色で、その髪の毛の中から生えるように大きくとがった猫耳がツンと上を向いて鎮座している。

顔のつくりは鼻以外は人のそれと同じに見えるが、そのアーモンド形のつぶらな瞳は驚きのために大きく見開かれていた。

この世界に転生して8年、初めて獣人の人と遭遇した瞬間だった。でも、なにも温泉で、しかもお互い裸で初遭遇しなくてもいいんじゃないかと思うんだけど……。

「ニヤッ!?!」

何かに弾かれたように　ザババッ!　と湯の中を後退する猫耳のお姉さん。

胸元を両手で隠し、首まで湯につかってこちらを睨んでいる。

「ニヤッ!?!　ニヤッ!?!　ニヤッ!?!」

猫耳のお姉さんは羞恥と驚きで顔を真っ赤にして何かを言おうとしているが、突然のことで言葉にできないようだ。

「あ、あの」

「……ニヤ、ニヤニヤニヤ、ニヤンでお前がここにいるんだっ!？」

「なんでと言われても……」

朝風呂に入りたかったからだとしか言えない……。

「……こんな時間、誰も入ってニヤいと思ってたのに……」

「その、なんかすみません。僕はもう出るのでごゆっくり」

そう言って、風呂から上がろうとする俺だったが、「ま、待て!」
という声にその動きを止めてしまう。

「えと、何ですか？」

「お、お前、わ、私を見て、何も思わニヤいのか？」

どうにも反応しづらい質問で、首を傾げてしまう。

「だ、だから、お前は……私の姿を見て、何も思わニヤいのか、と聞いている!」

「え、えっと……、綺麗、だと思います」

「!？」

「可愛いと思います」

「ニヤッ!？」

「キュートだと思います」

「ニャ、ニャにを言ってるんだ！？ お前は！？」

「お姉さんを見て、思ったことを……」

「わ、私は獣人ニャンだぞ！？ お前は私をさげすんだりしニャいのか！？」

「蔑む？　なんですか？」

「お前ら人間はあの教会の信者ニャンだろう？　それに、お前は人間の中でも更に特権階級の貴族様だ。ただの人間にさえ私たち獣人は見下され、恐れられているのに、お前はなんでそう思わニャい？　それに、ニャンでさっき私に謝ったんだ！？」

神光教会のことかな？　神光教会は再来年で立教5000年の大節年だそうで、近く大規模な祭典を行う予定らしい。

「あの教会の信者になったつもりはないんですが……。謝ったのは驚かせちゃったので……。というか、なんで僕が貴族だって知ってるんですか？　僕、言いましたっけ？」

「……あ」

しまった、という顔をする猫耳のお姉さん。
俺は薄々、この人の正体に目星がついてしまっていた。
この二日間であまり声を聞くことはできなかったけど、このハスキーな声。多分間違いない。

「もしかして……ダーニヤさん？」

「……む」

黙り込むダーニヤさんと思われるお姉さん。

……この反応。俺は質問に対する肯定と受け取った。

「ダーニヤさんですよね？ そっか、それで姿をあのマントとターバンで隠していたんですね」

「……違う」

「え？」

「ダーニヤ、だ」

「？ ダーニヤさんじゃないですか」

「違う！ ダーニヤだ！ ニヤじゃなくて、ニヤ、だ！」

すみません、ちょっと何言ってるかわからないです。

「えっと、ダーニヤさんですよね？」

「……もういい！」

どういう意味だ？ ニヤではなくニヤ？ 同じにしか聞こえないけど。

「……あ」

……ひよつとして。

「ダーナ、さん？」

「そうだニャ！」

なるほど、ナの発音がうまくできなくて、ニャになってしまったのか。

自分の名前をちゃんと呼んでもらえたのが嬉しかったのか、一瞬だけ嬉しそうな表情を浮かべるダーナさんだったが、すぐその顔に緊張が戻る。

「……何も聞かニャいのか？」

「聞くといっても……」

「私は、レイニャル領にある村の出身だ」

……何か話し始めちゃったよ。

俺は大人しく聞くことに専念する。

ダーナさんは俺がまだ8歳の子供だったこと、わかってるのだろうか？

俺の反応など無視して話すダーナさんの話はそれはそれはヘビィなものだった。

猫人族のダーナさんはレイナル領にある村の一つ。『終焉の山』の

麓に近い『ニルの村』出身だそうだ。

獣人が多く住むこの村はとても貧しく、もともと身体能力に優れたダーナさんは外貨を稼ぐために傭兵になったらしい。

この国での獣人や亜人の扱いはこの上なく悪く、彼らには人権でものが存在しない。そもそも人権なんて考え方もこの世界にはないようだが。

この世界で新しい人生を歩むことになって8年、本とか人の話を聞いたりしているうちにその辺の事情もわかったつもりでいたけど、実際にダーナさんの口から語られるそれは酷いものだった。

町などで獣人とわかれれば店では物を売ってくれない、売ってくれても法外な値段をふっかけられる。

その獣人が力を持たない者か、人気のない道を通っているようなら、すぐに路地裏に連れ込まれ暴行される。暴行だけで済めばまだましで、そのまま奴隷商人に売られたり、殺されてしまうことも珍しいことではないようだ。

彼らの仕事といえば農作業や土木工事などの重労働か、文字通り身を売るような仕事しかなく、賃金も雀の涙ほどしかもらうことはできない。

事実、ダオスタの町では4層の城壁の一番外側の区画以外に奴隷以外の獣人、亜人が立ち入ることは禁止されていた。

どれだけ人間達が獣人や亜人をひどく扱っているのか、その最たるものがレイナル領の前領主だった貴族らしい。

その領主は獣人の奴隷狩りを容認し、村には多くの奴隷商人や盗賊をけしかけ、自らの目に適った者は愛玩用に城で飼い、飽きれば部下に渡すか殺してしまう。

獣人の奴隷で領主の子供を孕んだものも当然多かったが、生まれた子供はそのまま奴隷商人に売られてしまったそうだ。

……その当時のレイナル領の一番の産業が獣人の奴隷の出荷だったというのだから救いが無い。

ニルの村も例外ではなく、多くの獣人が被害にあったらしい。

「新しい領主がどんな人間かを観察する為に、今回の依頼で潜り込んだんだ。もし、前の領主と同じような人間だったら、私は……」

結局、その領主は獣人の手によって殺されたらしいが、新しい領主がどのような人物なのか、レイナル領の住民は戦々恐々としているらしい。

まだダーナさん見極められないようだが、もし心無い領主ならば、ダーナさん自ら処分するとのことだ。

……だから、そういうことを俺に言っているのかと。

そのことを指摘すると、ダーナさんはまた「しまった」という顔をする。

……この人、ちょっと抜けてるんじゃないだろうか？

獣人は大抵、女性だけの種族、男性だけの種族で構成されていることが多い。

ダーナさんのような猫人族や兎人族などは女性だけの種族で、その種族の女性と他の種族の男性との子供は、ほぼ100%の確率で女性ならその種族、男性なら他種族の子供しか生まれない。

また同じように、犬人族や狼人族、鹿脚族などは男性だけの種族で、その種族の男性と多種族の女性とでは男性ならその種族、女性なら他種族の子供しか生まれない。

つまり、混血の子供というものは存在せず、獣人や一部の亜人は、彼ら単一の種族では子孫を残すことができない。

人間は人間族だけでも、そしてどんな人型の種族と交わっても子を成して繁栄することができる。

この事実が「故に人間族は優れた種である」と教える教会の人間至上主義の考えの礎となっているのはまぎれもなかった。

ダーナさんの話を聞いているうちにいつの間にか空は明るくなっており、遠くでは朝の教会の鐘が鳴っていた。

「話しすぎた。……いい加減出るかニャ。……お前、先に出ろ」

「了解しました。あ、そういうば、ひとつだけ聞きたいんですけど」

「ニャんだ？」

「ニルの村にも、温泉があっただんですか？」

「ああ、あったぞ」

無言でガッツポーズをとる俺だった。

11話 「引越し 2」 (後書き)

読んでいただき、本当にありがとうございます。

1週間に3話を目標に投稿してきましたが、ちよっときつくなってきました…。

毎日投稿できている作家さんは本当に尊敬します。

12話 「引越し 3」

12話 「引越し 3」

朝風呂から部屋に戻った俺を待ち構えていたのは、両親の説教だった。

朝起きたら横で寝ているはずの俺がいなかったので、かなりあせったらしい。

前世の日本と違ってこの世界は治安も良くないってことも、温泉の前にすっかり忘れてたよ。

心配させてしまったようで、反省……。

ダオスタを出発してから3日目、ニジェの町を出発する引越し隊。ここから先は山道で馬車も通れないような道を進む為、馬車の荷物には馬に積み、父と母、ジュリオとミランダさん、ヴィルホさん以外はみんな背に荷物を背負って歩いている。

俺はフィアスと一緒に馬具を取り付けられたラスの背中に乗せてもらっている。

馬よりもラスの背中の方が、俺もフィアスも普段から乗りなれているし、馬具のお陰ですこぶる乗り心地が良いのだった。

フィアスを後ろから抱きかかえるようにしてラスに乗っているんだけど、やっぱり怖い顔の傭兵達に囲まれている所為か、いつもより大分大人しい。

逆に傭兵達のほうは、二日間ともに姿を見たことなかったフィア

スを目にして顔を綻ばせている。……だけど、やっぱり顔は怖かった。

馬車はジェルジェット侯爵からのいただきものも含め、全て売り払ってしまったらしい。

もらいものを売っちゃって大丈夫だろうかと心配したが、ジェルジェット侯爵は売ることを前提として、高価な馬車を下さったのだそうだ。

ちなみに出発のときにダーナさんと目があつたけど、特に会話はしていない。

ニジェの町から見た山々が少しずつ近づいてきた。

フィアスがある山を指さして「あの山、ラスの耳みたいだね!」と俺に話しかけてくる。

確かに剣のように鋭く聳えるその山は、雪積の為に先端が白くなっていて、ラスの耳にそっくりだった。

「ほんとだ、んじゃ、あの山は『ラスの山』とでも名付けようか」

「うん!」

「わふ!」

俺の言葉にフィアスとラスが嬉しそうに返事をする。

傍から見えていたら幼い兄弟の微笑ましい光景だったんだろうけど、ジュリオが横から「かしこまりました。それではあの山を『ラスの

山』と呼ぶように領民にも徹底させましょう」とか言うもんだから、俺はあせってしまった。

……いや、ジュリオ、本気じゃないよね？ 山の名前とか、そんな簡単に決めていいものじゃないだろうし。

山あいの谷間を進むレイナル家引越隊。

いつの間にか空に青空はなく、代わりに黒い雲がたちこめていた。

俺は頬に冷たいものが落ちるのを感じるのと同時に何か胸騒ぎを感じて索敵の結界術を展開するのだった。

Side ヴィルホ

襲撃に一番先に気付いたのは、驚いたことにヤンの子せがれだった。索敵の結界術を張っていたっつーことだが、長いこと傭兵やってるが、そんな術を使えるガキなんざ聞いたこともねえ。

「約100メートルくらい離れてはいるけど、小さな人っぽいのが武器を持ってこっちに向かってくる。かなりの数だよ」

坊主の言ってるめーとるってのは良く分からねえが、この辺りで小人っていや、ゴブリンかホビットだ。

だが、ホビットは基本的に温和な連中で、武器を持って自分達から襲ってくるなんてことはないはずだ。

こりゃゴブリンに間違いねえな。大方、また雌が切れたか？

ゴブリンは一応、亜人に区別される男性種族だが、オークなんかと一緒に知能が低い。

雌がいなくなると巣穴から出て、雌を探し求めてそこかしこに被害を出しまくる。

ゴブリンにとって一番いい雌ってのが人間の女なんだが、奴らは節操なく獣人、亜人、果てには獣でもその対象としちまうらしい。

今までにもゴブリン討伐の依頼をいくつこなしてきて、巣穴まで入ったことも何度かあるが、巣穴の中に人骨が転がっているってのは珍しいことじゃあない。

たまに生きている女を救出することもあったが、たとえば生きていたとしても心がおかしくなっちゃっていて、折角救出しても自ら命を絶つものも少なくはなかった。

まあ、特に珍しい例で、自らゴブリンに身を捧げた女もいたって話も聞いたことがあるが、それはごく稀な例だろう。

そのゴブリンに身を捧げた女ってのは大切にされていたらしく、婆さんになってから、無事に人里に下りてきたって話だ。

そのあとに異端審問で魔女認定されて、火あぶりになっちゃったがな。

奴らにとって女ってのは王様と同じようなもんらしく、大切に扱おうとするみたいだが、女は逃げたくて必死だってなもんで、結局鎖なり何なりで閉じ込められて、無理やりやられちまう。

ゴブリン共にとっては女がいないと子孫が残せないから必死なんだろうけどよ、人様に迷惑かけるってえのは、許せるもんじゃねえよな。

「おい！ てめえら出番だ！ 雇い主様をしつかり守るぞっ！！」

「オオッ！！！」

俺が戦闘の指示をすると、それに勢いよく応える部下達。
みな気合いが入ったいい目つきをしていやがる。

全員が迎撃の準備を整えて、気合いも十分。しばらくすると、道の前方、後方にゴブリンが現れた。

数はざっと数えても100匹はいる。

……やべえな、こりゃ。

俺の心配をよそに戦闘はこちら側の圧勝で終わった……いや、戦闘というよりは虐殺だな、あれは。

気合い入れて迎撃しようとした部下達も目を白黒させて呆然としてやがる。気持ちは俺も同じだ。

2人と一匹の活躍で戦闘は5分ほどで終わった。ゴブリン共はほぼ全滅に近い。

普通、100匹を超えるゴブリンの群れなんざ、逆にこっちが全滅

していてもおかしくないところだが、いや、全く恐れ入った。

はっきり言って、ゴブリン共が哀れだとすら思っちゃった。

赤火のヤンと呼ばれる奴の戦いは先の戦争で同じ部隊にいたときもよく見ていた。

久しぶりに見る奴の動きは、そりゃあすげえもんだった。

肉体強化の術を使ってるのかはわからねえが、人間にそんな動きができるものかと、つい見惚れちまう。

素人はその動きや剣の速さなんかに目が行って気がつかねえんだろうが、ヤンの真髄はその動き一つ一つに全く無駄がないってことだ。剣を振るとき、攻撃を避けるとき、敵の体の動き、その全てが次の一手、二手に繋がっている。

真正面から跳躍し、ゴブリン共の群れに突入するヤン。

一見力任せにゴブリンを頭から真っ二つにし、その勢いのまま足元の土に剣がめり込んだように見えても、跳ね上げるその剣で土を撒き散らし、周囲のゴブリンの眼つぶしに使う。

一瞬だけ動きの止まったゴブリン共を横なぎの一閃で5つの肉塊に変え、そのまま流れるように次の行動に移る。

使い慣れた愛用の両手剣をまるで小枝でも振り回すように扱うその姿は、伝説の勇者アマディラウスを連想させた。

嫁さんの名前は確かマリアとか言ったか？ 昔見たときもすげえ別

嬪さんだと思ったもんだが、その容姿はまだ幼さを含む瑞々しいものだったと記憶している。

だが今は成熟した大人の魅力とでも言うか、艶っぽさが加わり、その別嬪っぷりはより一層増しているような気がした。

だが、俺は嫁さんの顔を見るといまだにあの苦いのか甘いのか辛いのかよくわからん食い物を思い出して冷や汗が出てきやがる。

あれはもう何があっても食いたくはねえ。

ヤンの奴はうまそうに食っていたが、思えばあれがヤンの奴を一目置いた瞬間だったかもな。

そんな嫁さんのほうは遠距離からゴブリンを攻撃しているが、その術の情け無用っぷりには流石の俺でもぞっとしちまった。

確か嫁さんは結界術を得意としていたはずだが、あれは結界術に入るのか？

嫁さんは捕縛用の結界のようなものでゴブリン共を4，5匹包むと、結界を縮めて中のゴブリンを圧死させているのがわかる。

ゴブリンのうめき声と骨の碎ける音がしたかと思うと、そこには赤い血を噴き出す不格好な肉団子が転がっていた。

肉団子の術って勝手に名付けさせてもらったが、あれは喰らいたくはねえな……。

最後にこの引越しのきっかけになったと聞いている、黒い犬っころだ。

はじめに見たときはやけにでけえ犬だと思ったもんだが、実は狼だったと聞いてびっくりだ。

さらにヤンのせがれやお嬢ちゃんが躊躇いもなく乗っかっているのを見て、やはりこいつらは只ものじゃねえな……。など思ったが、実はこの犬っころも相当やべえもんだった。

俺が見えたのは、ゴブリンの固まっているところに突風のように突進していく黒い影と、衝撃とともにまるで木の葉のように舞い上がるゴ布林共。

舞い上がったゴ布林共は、腕や足、頭を失っていて、地面に着く頃には絶命しているだろうと思われた。

あの狼の力のほどはわからんが、はっきり言って魔獣レベルだ。あんな魔獣を、どうやったら倒せるのか、俺には検討がつかねえ。例え1000人の部下がいたとしても、俺は戦うなんて思わねえよ。

その後もちよこちよことゴ布林やオーク、獣の襲撃を受けながら、予定よりも大分遅れたが、俺達は無事にレイナル領の城に辿りつくことができた。

それは、ダオスタを出発して丁度10日目のことだった。

13話 「探検」 (前書き)

忙しくて…というのは言い訳にしかありませんよね…。

お待たせしました。13話です。よろしくお願いします。

13話 「探検」

13話 「探検」

レイナル領は山と山に囲まれたすり鉢状の盆地で、四方八方どこを向いても山、山、山しかない。

ダオスタ周辺は草原や森が広がっていて穏やかな雰囲気だったのに、ここは気温が高くて、なんというか昔テレビで見た東南アジアなどの熱帯系の自然あふれる風景に近かった。

標高が明らかにダオスタの辺りよりも高いのに何でこんなに気温が高いのか不思議に思ったんだけど、火の精霊の力が強くて火山活動が活発な地域なんだということを母から聞いて納得した。

最近朝日が昇る前に起きてラスと一緒に城の周囲を探検することになっている。

風のように疾走するラスの背に乗って村の位置や川、山、森に生息する動植物の分布なんかを調べているんだけど、これが思いのほか楽しいものだった。

この間なんか天然の温泉を偶然見つけて、それ以来2、3日に一回はラスと一緒に入浴することになっている。

ちなみに今はラスと一緒に暮らしていない。

城で人間と一緒に暮らすより、自然の中で暮らした方がラスにとっても良いと考えたからだ。

今日も俺は日が昇る前にベッドから出て、ベランダへと続くドアを

開く。

ベランダには既に「いつでも出発準備できてるよ!」と言わんばかりにこちらを見て尻尾を振るラスの姿があった。

「お待たせ、ラス。今日もよろしく」

「わふ」

俺がラスの背に飛び乗ると、ラスはベランダから勢いよく跳躍する。

慣れってすごいもんだよね。

城の5階からのダイブは最初「あ、俺死んだな……」と俺に思わせるのに十分なものだったけど、今では気持ちよくすら感じている。

「今日は昨日恐竜を見つけた辺りへ行ってみよう!」

「わう!」

落下中に提案をすると、ラスは着地と同時にものすごい速さで疾走する。

風の結界を張っているおかげで風圧をまともに浴びることはないけど、恐らく新幹線も真っ青な速度で移動しているんじゃないだろうか。

あっという間に目的地に到着すると、俺は索敵の結界を展開して周囲を探索する。

昨日はこのあたりで恐竜っぽいものを見たんだよね……。

恐竜といっても、ダチョウみたいな草食系のやつだけ。

しばらく周囲を探索したけど、その恐竜を見つけることはできな

った。

かわりに金色のカブトムシを捕まえることができたけど、これ、売れないかな？

この探検での収穫は多い。

はじめは単なる好奇心からだっただけで、温泉の発見に始まって、虫を調べていたらミツバチのような虫を見つけて、その巣には蜂蜜のようなものを発見したり、植物を調べていたらリングゴやミカンのような木の実がなる植物や、稲のような植物を発見したり、中には危険な虫や植物も多かったけど、とにかく動植物の種類が豊富で、次から次へと色んな生き物が出てきて飽きることが無かった。

ただ、サンプルを回収して城で育ててみようと考えてるんだけど、早朝に城を抜け出していることは内緒にしているし、どう説明したらいいものやら……。目下、それが悩みの種となっている。

小高い丘の上に建てられているレイナル家の住む石造りの城はいつ、誰が建てたのかわかっていないが、代々領主はこの城に居を構えていた。

ジュリオが先発隊を送り込んでいたおかげで10年以上放置されていた城はある程度修復がされていて住むには問題なかったけど、今までの家に比べて圧倒的に広いので、部屋の把握に時間がかかりそうなのと、あと、この城変な仕掛けが多いんだ……。

ここ1ヶ月で見つけたのは変なレリーフをはめると鍵の開く扉とか、パズルを解かないと開かない扉とか、レバーを引っ張っていないと開いてくれない扉とか……。

扉の中には書斎があったり、図書室があったり、地下室への階段があったり……。まるで迷路だ。罫もふんだんに盛り込まれている。

「アラン君、今日はどのあたりを探索する？」

「えーと、地下室で見つけた鍵がありましたよね？ あれで東の塔の扉が開くか試してみましようよ」

「そうだね、……開かない扉は東の塔の扉と、地下牢の扉、……あそこがあったっけ？」

「書斎の扉と、あと扉ではないけど、図書室の机に鍵がかかってましたね」

「そっかあ、……いやあ、ヤン様に城の探索を命じられたときはがっかりしたけど、これはこれで楽しいよね」

「でも、先代の領主はこういうのに興味なかったのかな？ 仕掛けが全く手つかずですよ」

「仕掛けが難しすぎるんだよ……。水責めとか、落とし穴とか、天井が落ちてきたり、罫も同じくらい多いんだから、普通はそのままにしちゃうよ……」

「そんなに難しいかな？ パズルとかは少し難解なものもあるけど……」

「難しいよ！ なんだい、あの板を動かして絵を完成させるとか、暗号を解いて決まった場所に人形を置くとか……！ こんな仕掛けを作った人は相当な変人に違いないよ！ というか、なんでアラン

君は解けるんだい!？　それがもつと信じられないよ!」

「ええと、まあ、うん……、こういうの好きなんですよ」

セアドさんが言っているパズルはそれほど難しいものはない……と
思っているのは俺だけなんだろうか？

昔はよく数独とか、クロスワードとか、ルービックキューブとか、
そこまでお金がかからず、暇を潰せるものにはまってたからなあ…
…。

こういうのを解くのは好き、というか、慣れてるってのもあるかも
しれない。

「にしてもダーナさん、遅いですね」

「そうだね、またフィアスちゃんに捕まってるのかな？　……って、
来たみたいだね」

セアドさんの視線の先には、全身を覆う特徴的なシルエットの格好
をしたダーナさんの姿があった。

「……待たせたニヤ」

「じゃあ、今日も行きましょうか!」

「オー!」

「オ、オー…!」

こうして今日も、セアドさん、ダーナさんと3人で城の探検を始め

るのだった。

14話 「そこにいたもの」

14話 「そこにいたもの」

この城に引っ越してきて3ヶ月が経った。

城の探検も、扉という扉は制覇したと思う。

変な仕掛けを施してわざわざ隠してあるものは何かと思えば、歴代領主の日記だったり、別の部屋の鍵だったり、謎のオブジェだったり、探すのは楽しいんだけど、探し当てたものに心惹かれるものはあまりなかった。

もうちょっと宝剣とか宝具とか、伝説の魔道書とか、そういうものがあればいいのに、見つかるのは次の手がかりだけとか、なんとか、性格の悪さが滲み出ているね。

最近はこちらといった発見がないので、俺は城の地図を作製して空白の空間に何かないかを探しているところだ。

地図の作成と暗号やパズルを解くのは俺が、城の内部の探索はダーナさんが、城の外部の探索はセアドさんがそれぞれ担当している。

自分達の城なんだから、自分達で解体してしまえばいいとか乱暴なことを考えた時期もあったんだけど、どうやらこの世界の高級住宅では建物に法術を施すのは当たり前なようで、決まった鍵や仕組みを利用しない限り何をしてもびくともしないように作られているらしかった。

術の力以上の力を加えれば壊れることはあるんだろうけど、そんな力を加えたら城全体が壊れてしまうってこともあって、こんな風に地道に鍵や仕掛けを探して解除していくしかなかったのだった。

「お疲れ様です。今日は何か収穫ありました？」

夕方、定時報告のためにセアドさんとダーナさんの3人で机を囲む。

「お前の言っていた部屋を調べてみたら、また壁にボタンを見つけたニャ」

ちなみにこの3人で会う時や父と領内の村へ同行する際、ダーナさんは以前のように姿を隠すのをやめている。

なんというか、父も母もヴィルホさんも初めからダーナさんの正体を知っていたみたいだ。

そりゃそうだよね。雇う人間の素性を調べないわけがないし、そもそもダーナさんて意外と隙があるから色んなところでバレバレだったんだろうと思う。

セアドさんに姿を晒した時、セアドさんは全然知らなかったようで心底驚いてる様子だったけど。

「……またですか？　今、ボタンの数って、20個くらいになってませんか？」

「25個にニヤったニャ」

「25……。前に見つけたメモに27個のボタンの話が出てきたよ
うな……。？」

「押す順番とかあるのかな？　まあ、そういうのは全部アラン君に
任せたよ！」

なんで最年少の俺に振るかな？ まあ、謎解きは面白いからいいけどね。

そうそう、バレバレだったといえば、ラスとの早朝領内探検もうちのお母様にはバレバレだったみたいです……。

ラスと俺は母の結界に引っ掛かりまくりだったみたいで、例のサンプルを育てて管理するって話も「やっとなんかしているか話してくれるのね？」とか言われてしまった。

まあ、母が嬉しそうだったから良しとしますか。

この城探検の成果もあって使える部屋が大分増え、その中の部屋のひとつで領内で採取してきた植物や昆虫を育成している。

「じゃあ、ダーナさんは引き続き各部屋の探索ということで。セアドさんのほうは何かありました？」

「僕のほうは何もなかったよ」

「……無能ニヤ男だ」

「む！ そういう君だって、一日に一つしかボタンを見つけられていないじゃないか。僕はこの間、太陽のオブジェクトを見つけたんだ。あれに見合う発見を君はしてない。よって、僕の勝ちだ！」

「あれはこいつが怪しいって言った場所をお前が登ってみただけじゃニヤいか！？ お前はただ登っただけで、発見はしてニヤい！だから私のほうが功績は上だ！」

「なんだって!?!」

「ニヤんだ!?!」

最近、二人が顔を合わすといつもこんな感じになってしまう。
仲がいいのか悪いのか……。

「二人とも、そこまでにしてください。……それじゃあ、明日からはセアドさんも内部の探索にあたるってことでお願いします。いいですね?」

「わかったよ! ボタンの10個や20個くらい、簡単に見つけて見せるさ!」

「ほほう、そこまで言うのニヤら、見せてもらおうか? 尤も、お前のようニヤ単純バカに、あのボタンを見つけることニヤんてできると思わニヤいがニヤ」

「君とは違うからね! できるに決まってるさ!」

「ニヤんだって……!?!」

「なんだよ!?!」

またお互いに顔を付け合わせて睨みあう。

「あゝ、もう! いい加減にしてください! 今日これで解散です! お疲れ様でした!」

二人を部屋から文字通り追い出し、俺は一人机に向かう。

机の上にはひと月ほど前に発見した初代城主の日記が開かれている。

かなり古い時代の書物で、現在とは文法や表現や言い回しが異なっていて解読には苦労したけど、なんとか半分くらいまでは読むことができた。

著者の名前はニコラ・テスラ、それが初代城主の、この城の基を築いた男の名前だった。

セアドさんも前に言っていたけど、このニコラさんはかなりの変わり者だったみたいで、日記の中には『私がこの世界の歴史を作る』とか『大地を割って見せる』とか、香ばしいセリフがてんこ盛りになっていた。

今のところ大した手がかりはないけど、法術研究者として自らが開発した術式を売って生計を立てていたようで、母もその名前を知っていた。

母曰く「あらゆる法術の基礎を築いた天才」だそうで、建築物に術を施す仕掛けも彼の発案だったらしい。

翌日、俺とセアドさんとダーナさんとでまだ探索していない部屋を調べてみると、新たに2個のボタンを発見した。

一つは俺が、もう一つはダーナさんが発見したんだけど、セアドさんは結局何も発見することはできなかった。

「フフフ……。あんニヤに大きいことを言っておいて発見できニヤいニヤなんてニヤ……。賭けは私の勝ちだ！」

「ううう……。一番ありそうな部屋を選んだのに……」

崩れ落ちたセアドさんを文字通り見下すダーナさん。
いつの間に賭けなんかしてたんですか……？

ちなみに賭けの対象となっていたのはその日の夕飯のおかずだったそうで、その日セアドさんはおかずを取り上げられ、周囲に物欲しそうな目を振り撒いて同僚を困惑させていたらしい。

ボタンはメモにあったように全部で27個。

そのボタンを初めのボタンを押してから1時間以内に他のボタンをある順番で全て押すと扉が開かれる仕組みになっていた。

セアドさんとダーナさんと手分けをして順番にボタンを押していく。

丁度俺の部屋のボタンが最後のボタンとなった。

「これが最後のボタンか……」

目の前の石のボタンを押しこむと突然目の前の石壁がゴゴゴ……と音を出して割れ始める。

「おおお……！」

仰々しく石壁が割れたその先には人一人がやっと入れるくらいの狭い四角い小部屋が現れた。

久しぶりの大きな発見に俺はワクワクした気持ちを抑えられず、その小部屋の中に入る。

いつもならこういう仕事はセアドさんに任せるんだけど、まだセアドさんもダーナさんもこの部屋に到着していないし、いいよね？

自分で自分を納得させながら入ったその小部屋の内側は鉄でできており、部屋の右手の壁には二つのボタンが縦に並んでいた。

「まるでエレベーターみたいだな……」

このボタン、押していいかな？　だめかな？　何が起こるかわからないし、やめといった方がいいよね？

そんなことを考えながら小部屋のボタンを調べていた俺だったが、ど、いつの間にか合流していたセアドさんの大きな声に、思わずそのボタンを押してしまうことになる。

「あ！？　アラン君、危ないから勝手に入っちゃだめだよ！！」

「えうっ!?!」

カチッ

「……あ」

「……え？」

押されたボタンに反応して、小部屋は出現したときと同じようにゴゴゴ……という振動音と共に扉が閉まり始める。

呆然とするセアドさんの姿は扉の隙間に消え、扉が完全に閉まっ

てしまうと室内の明かりはボタンの薄ぼんやりとしたものだけとなり、小部屋の中に静かな振動音が響く。

昇っているのか下っているのかはわからないけど、小部屋が移動しているのはわかった。

というか、本当にエレベーターだったとは……。

ガタンッ！

しばらくの間小部屋の中でじっとしていると、大きな振動とともに小部屋は停止する。

どうやら目的地に着いたらしく、小部屋の扉が開く。

小部屋の外は少し広い空間になっており、一つだけある木の扉がその存在を主張していた。

俺は松明に明かりをつけ、木の扉を恐る恐る開く。

部屋の中を照らすと、中には沢山の本と本棚。そして何に使うのか見当もつかないような器具が所狭しと並べられていた。

なにかの実験施設みたいだと思ったが、多分その通りだろう。ニコラさんものだろうか？

何か面白いものはないかと周囲を調べようとしたそのとき、不意に頭の中に声が響く。

『あなたはだあれ？』

部屋の一番奥。他の場所とは違い、少しだけ整理されて広くなっている部屋の片隅にその声の主はいた。

丸い水槽の中に浮かぶ真っ白な女の子。
そのどこまでも透明な瞳が俺を見つめていた。

15話 「貴方と私が出会う日」 (前書き)

丸々一ヶ月も間が空いてしまいました……。
お待たせしてしまい、本当に申し訳ありません。

15話 「貴方と私が出会う日」

15話 「貴方と私が出会う日」

side ???

私を捕えた人間は言った。

「貴方を掌握し、私がこの地の神となる」

彼は私を罠にかけてここに閉じ込めた。
深い深い、冥府のようなこの場所に。

彼は私にありとあらゆることを試した。

薬を使ったり、雷の力を使ったり、私の体を切ったり、焼いたり、煮たり、時には性交渉も試みた。

たとえ器が駄目になっても、すぐに新しい器に移され、それは延々と続いた。

私を掌握するだなんて、ただの人間にできるはずがないのに……。

彼にできたのは私をこの肉の体に押し込め、封じたことのみ。

でも、それが私の全てを奪った。

私の力は勿論、私が愛するものの、私を愛するものの、私が畏れるものの、私を畏れるものの、全て。

はじめは怒りで震えた。

次に悲しみを覚え、今では諦めに変わっている。

私は永遠に自分の姿すら見ることが叶わない暗闇の中に閉じ込められるのだと……。

私は誰かが来るのをただただ願い、ただただ祈っていた。

あれから何百……いや、何千年の時間が過ぎたのだろうか？

思い出すのはかつて私の眼下にあった緑の大地とそこに暮らす生き物達。

大地の恵みを一身に受け、生を謳歌する私の子供達はいつも喜びに満ちていた。

今、私の名前を呼ぶものはもういない。

——光を捉えた。

それは松明の上で燃える、輝かしい火の光だった。

光を持つ者は小柄で、人間の子供だということがわかる。
でも、私達が使う神力に近いものをその身に感じる不思議な子供。

『あなたはだあれ？』

私が問いかけると、光を持つ子供は動きを止めて辺りを見渡す。

良かった。ちゃんと届いたようね。

誰かに意思を伝えるのなんて随分と久しぶりだったから、うまくできたのか不安だったのだけど……。

光を持つ子供は私を見つけると少しの間動きを止めて、その美しい瞳を私に向けていた。

『あなたはだあれ？』

私が再度問いかけると光を持つ子供は戸惑いながらもその口を動かし、私に向けて言葉を発する。

「俺の名前はアラン・ファー・レイナル。……この城の新しい城主の息子だよ。……君はいつたい？」

光を持つ子供はアランと名乗った。

私は久方ぶりの他者との接触到興奮していたけど子供相手にみっともない姿を見せるわけにもいかないと思い、興奮を抑えながらアランの質問に応える。

それにしても、随分と大人っぽい喋り方をするのね……。最近の子供はみんなこうなのかしら？

『怖がらなくてもいいわ。どうせ今の私には何の力もないもの……。私の名前はイツパ・パロ・ミミラトル。私はかつてこの地を管理していた、貴方達からすれば神という存在よ。』

「えっ？ ……神……様？？？」

やっぱり驚いているわね。それはそうよね。神様だなんて名乗られても、私自身、こんなところに閉じ込められている神様なんて見たことないもの。

『アランの言いたいことはわかるわ。なんで神様がこんなところにいるのかってことよね？ それを話すには少し時間がかかるけど、いいかしら？』

頷くアランを見て、私は色々な事を語った。

とある人間に捕まってこの肉身に封印されたこと。その人間にされたこと。話されたこと。脅されたこと。懇願されたこと。その人間が死んだこと……。

私が統治していた頃のこの地のこと。水と緑と風に恵まれた美しい大地とそこに暮らす様々な生き物達。かつての人間達はそこを楽園と呼んでいたこと。

そして、炒った豆が芽を出すまではこの肉身から解放されないという呪いをかけられて、この暗闇に封じ込められたこと……。

アランは私の話に時に頷き、時に怒り、時に涙を流して、静かに私の話を聞いてくれていた。

不思議ね。アランには何でも話せてしまいそう。これも彼に宿っている不思議な力のせいかしら？

私はアランのことが知りたくなってしまい、彼に話を振ることにした。

『さて、今度はアランの話を聞かせてくれるかしら？ あなたのその不思議な力のことも含めて……ね？』

「えっ!？」

『隠しても駄目よ？ こんなところに閉じ込められてしまっているけど、私も神族の端くれだもの。あなたに宿っている不思議な力を感ずることくらいはできるわ。それで、それはどんな力なのか聞かせてもらえるわね？』

アランは困ったような表情をして迷っていたようだけど、観念したように話した。

アランの力は自分以外の存在に対して力を賦与する力。
アランはそれがどれほどのものなのかよく分かっていないようだけど、恐らく運命さえ変えることができる素晴らしい力。
別の世界の神様から頂戴したものだそうだけど、相当位の高い神様なんだろうね。

恐らくその世界全てを統治していらっしゃるくらいなの。

あと、アランは前世の記憶を鮮明に持っていた。

前世の記憶を持っている人間はそれほど珍しい存在ではないけれど、別の世界から転生してきたというのが気になるわね。

何かその神様の思惑があると考えるのが普通でしょうけど……。

どちらにしろ、その神様が何を考えてアランに力を与えてこの世界に転生させたのか、一地方を治めていたに過ぎない私のような次

元のものにはわかるはずがないわね……。

……それよりも。

『アラン、お願いがあるの』

「なんですか？ えーと……ミミラトル、様？」

『ふふっ、ミミでいいわよ』

「あ、はい。ミミ様」

『あなたのその力を貸してくれないかしら？ 力を封じられた今の私では、この肉身の束縛を解くことができないの』

「わかりました。……でも、どうやって触れれば？」

アランはそう言って私を捕えている器を見上げる。

『恐らく、器越しでも力を使うことはできるわ。私の手にアランの手を重ねてもらえる？』

「はい」

『いいわ。アラン、貴方の力を使ってみて』

私がそう言うと、器越しのアランと手から暖かいものが私の中に流れてくるのを感じる。

それは段々と熱く、力強くなって……？ ……えっ！？

『ん……！　すごい……！　大きくて、とても力強いのが、私の中に入ってくる……！』

時間にして数十秒くらいかしら？　ようやく落ち着いたと思ってアランを見ると、アランは顔を赤くして俯いてしまっていた。

私は心配して声をかけるけれど、アランの返事は要領を得ない。

……本当に、どうしたのかしら？

私は身に溢れるを感じつつ、私を捕える透明な器を壊すためにその力を解き放した。

高圧な光を受けて崩れ落ちる透明な器。

ようやく……ようやくこの暗闇から開放される！　孤独から開放される！

私は喜びで夢中になって力を解放し続けた。

その後、我に返った私が見たのは、地響きとともに崩落する部屋と瓦礫に埋もれて気絶しているアランの姿だった……。

16話 「幽霊騒ぎ」

16話 「幽霊騒ぎ」

まさか神様を見つけてしまうなんて夢にも思っていなかったけど、ミミ様を見つけたところでひとまずお城探索は区切りを迎えた。

……というか、中止にさせられた。

それにしても、あのときは大変だった。

ミミ様がいきなり大きな力を出したお陰で俺は気絶するわ、あの地下室は埋まってしまうわ、地震が起きて城壁の一部が崩れるわ……。

あの地下室の本やら設備は状況的にテスラさんのものだったんだろうから、かなり貴重なものもあったんだろうになあ……。

気絶した俺はミミ様の力で助けてもらったらしく、北の塔の部屋に倒れていたらしい。

詳しい脱出方法は、……謎だ。

ベッドで目を覚ました俺を待っていたのは極限状態まで怒っている母と泣いている妹だった。

母にはまず、なんで一人で先に進んだのか。なんでその小部屋の部屋から離れた塔に倒れていたのか。そして6時間もの間何をしていたのかを問い詰められ、妹には泣きながら頭をポコポコと殴られ

た。

「おにいさまのばあかああ……！　フィアス、すつつつごくしんばいだっただからああ……！」

「フィアス、心配かけてゴメンな。……っというか、痛い！　地味に痛い！」

「みんなにしんぱいかけるお兄様なんて、痛くしなきゃだめなんだもん！　フィアスがみんなの分もお兄様を痛くするんだもん！」

ポコポコと俺の頭を叩き続けるフィアス。

「フィアス、そのくらいにしておきなさい？　あとはお母様がたっぷりとお兄様に言い聞かせますからね……？」

あー……、ヤバイ……。フィアスに和やかに話しかけながら、こっちを見る目が座ってますよ、お母様……？

フィアスはメイドに手を引かれて退室するが、退室前に「お兄様、たたいてごめんなさい……」と謝る姿が猛烈に可愛かった。

勿論許すよ！

母と一緒に退室するフィアスを見送り、……パタン。とドアが閉まると、母はゆっくりとこちらを向いた。

「さて、アラン？　じっくりと話を聞かせてもらいますよ？」

……そこには鬼が存在していた。

なんで一人で先に進んだのか？ ……ごめんなさい、好奇心です。

怒られました。

なんでその小部屋の部屋から離れた塔に倒れていたのか？ ……
わかりません。

怒られました。

6時間もの間、何をしていたのか？ 洗いざらい話したんだけど、
母はどうも納得していなかった。

怒られました。

ミミ様がここにいれば証明ができるのに、肝心のミミ様はどこに
行ったんだ！？

それにしても、普段温厚な人ほど怒ると怖いっていうけど、本当
なんだね……。

母を怒らせてはいけない人物第一位であるということを俺は深く
心に刻み込んだ。

その後も暫くの間、母の説教が続いたことは言うまでもない。

それから1ヶ月くらい経ってからだろうか？ 城で幽霊騒ぎが起
こり始めたのは。

事の始まりは深夜の警備をしている、とある兵士の目撃談だった。

）side とある兵士

この前の深夜の当番だったときの話なんですが……。
見ちゃったんですよ……。

え？ 何を見たかって？ そうですね……。

まあ、話を聞いてください。

僕はいつも通り深夜の警備の任務に就いていました。

その日もいつものように担当場所の見回りをしながら、ぼけーつ
と月を眺めながら虫の声に耳を傾けていたんです。

最近は特に綺麗な音を出す虫が鳴いていて、とても綺麗な鈴の音
みたいに聞こえるんですよ。

まあ、そんな話はいいとして……。

何回目の見回りの時は忘れたんですが、僕はふとお城のほうに気がなって、振り向いたんです。ゆっくりと。

振り向いた先には当然お城がありました。

お城の壁にはいくつかの窓があつて、外からでも中が覗けるようになっていました。

窓の向こうは確か廊下になっていたと思います。

当然廊下は真っ暗です。

でも、そのときは違いました……。

僕から見て廊下の右側に白く光るものがあつたんです。

遠くからだつたので、はじめはそれが何なのかよくわからなかったんですが、よくよく見てみると、その白いものが人の形をしていることに気が付きました。

それは、長い髪の少女の姿をしていました。

少女は肌も髪も服も全部真っ白で、とても生きている人間には見えませんでした。

しかも、ぼんやりと光っているんです。

僕は怖くなってしまい、急いでその場を離れました。

翌日、あらゆる人にそんな少女が存在しているかを聞きまわったのですが、誰もそんな少女のことは知りませんでした……。

Side とあるメイド

私も見てしまいました。

その日は寝苦しい暑い夜だったことを覚えています。

トイレに行く為に深夜起きた私は使用人寮の廊下を歩いていました。

やけに明るい夜だと思った私は、廊下の窓から外を眺めます。

月が綺麗でした。

でも、その月とは別に白く光るものを目の端に捕えてしまったのです。

それは窓から見える城の塔。

その窓にそれはいました。

はじめは誰かが塔にいるのかと思いました。

……でも、変なんです。

その塔は以前アラン坊っちゃんが行方不明になったときに発見された場所。

塔は現在立ち入り禁止になっていて、嚴重に鍵がかけられて、その上からマリア様が結界術を施して、誰も入れないはずの場所です。

そもそも今は深夜。こんな時間に誰かがいることなんてありえません。

そこまで考えが及んだ私は急に怖くなってしまって、急いで部屋に戻りました。

私が見たものは一体何だったのでしよう……？

え……？ トイレ？

……同室のリルに付き合ってもらいましたよ……。

Side
フィアス

きょうは白いお姉ちゃんとおそびました。

お姉ちゃんはまっしろでとってもきれいです。

でも、お姉ちゃんはよるにしか来てくれません。

きょうも来てくれるかなあ？

17話 「幽霊の正体」 (前書き)

お待たせしました。17話です。
いただいた感想については順次返信させていただきまますので、気長に待っていただけると幸いです。

17話 「幽霊の正体」

17話 「幽霊の正体」

遂に噂の幽霊に遭遇してしまった。

その正体は……って、色々聞いていた特徴から予想はできていたんだけど、いざ遭遇してみると予想外に怖かった。

あれは確かに幽霊と言って怖がられても仕方ないと思ったよ……。

ある夜、俺は目を覚ました。

トイレに行く為に部屋から出て、城の廊下を歩く。

石造りの城の廊下はなんとも冷たい雰囲気が漂っていた。

辺りに響くのは俺の足音だけ。

不意に寒気がしてなにかの気配を感じ取った俺は後ろを振り向く。振り向いた先には今通って来たばかりの廊下。

闇に包まれた廊下は夜目でもその先を見通すことはできなかった。

とりあえず何もなかったことにホッとしつつ前を向きなおした俺の目に飛び込んできたものは、10メートルほど先にある、白くぼんやりと光る少女の姿だった。

風もないのにひらひらと舞うワンピースの裾と長い髪の毛。

思わず息を飲み、その現実味のない光景を凝視する。心なしか少女の口には笑みが浮かんでいるように見えた。

少女は音もなく静かに佇んでいたかと思えば、手も足も動かさずにスーッと滑るように俺に接近してくる。

もう、いろいろと不意を突かれてしまって、俺はその少女が目の前まで移動してくるまで声も出せずに、ただ立ち尽くすことしか出来なかった。

「アラン、こんばんは。そしてお久しぶりね」

「……ミミ様？」

あまりにびっくりしたから状況を把握するのに少し時間がかかったけど、目の前にいる白く光る少女のは、確かにミミ様だった。

あれから1ヶ月も経っていて、俺もあるとき本当にミミ様が存在していたのか信じられなくなっていたけど、ミミ様だった。

そして多分、ここ最近の噂の幽霊の正体もミミ様に違いないだろう。……間違いない。

「――……びっくりさせないで下さいよお……」

極度の緊張から解放され、思わず情けない声を出してその場にしゃがみ込んでしまう俺。

「どうしたの？」

しゃがみこんだ俺にミミ様はなんでもなさそうに聞いてくるけど……。

どうしたの？　じゃないですよ……。　なんですか、さっきの移動方法は。　全身白くて光ってるのは神様だからしょうがないとしても、あれは怖いよ。……そりゃ、みんな怖がるよ！

ミミ様は解放されてから色々と体の使い方を試していたんだそうだけど、一番楽な移動方法がさっきの方法。体をわずかに浮かせて移動する方法だったらしい。

他にも方法は歩くとか、走るとか色々あるんじゃないかと思ったが、魂と肉体が釣り合っていない為、うまいこと体を動かすことができないんだそうだ。

例えるなら、ビニール袋にいくら入れても価格はいくら！　って特売やっているお店で、ところどころ破けそうなくらいビニール袋にギッチギチに商品を詰め込んだ状態というか……。

とにかく小さな器に極端に大きなものを無理やり入れている状態な為に、何をするのにも窮屈でしようがないらしい。

そういえば目撃談の中に、白く光る少女がぎこちない……。おおよそ人間では考えられない動きをしていたってのもあったな……。

試しに普通に歩いてみてくださいとお願いしたら、ミミ様は小刻みに震えながら同じ側の肩と足を同時に出して歩く……。言い方は悪いが、まるでゾンビのような歩き方だった。

……移動方法はさっきの方向でお願いします。

「それで、この1ヶ月、ミミ様はどうされていたんですか？」

場所を移動して、今は俺の部屋のベッドの上でミミ様と俺は向かい合わせに座っている。

あらためて見るミミ様の姿はその真っ直ぐで長い髪の手までもが優しい光で包まれていて、とても幻想的で美しいものだった。

外見は15歳前後の幼いものだが、その大きな瞳に宿る意思は外見に関係なく思わずひれ伏してしまいそうなくらいの神々しさを感じさせる。

服は肩のない純白のワンピースを着ており、装飾品の類は身につけていない。

俺はさっきとは別の緊張を覚えながら、なんでもあの部屋から解放されてから1ヶ月もかかってから姿を現したのかをミミ様に尋ねる。

ミミ様によると、どうやら解放されたミミ様の力を感じた色んな神様や精霊が集まってお祭り騒ぎになったらしく、10日間ほどぶっ続けで宴が続く、それが終わったと思ったら色んな神様に今までのことを話したり、聞いたりして10日間。

そして神様間での色んな手続きを終わらせるのに10日間かかり、とても忙しかったらしいことが判明した。

最近はやっと自由にできる時間が増えてきて、夜暇な時間に城の中を彷徨っていたとのことだ。ちなみに昼は神様としての仕事に専念している為、身動きがとれないらしい。

「神様も大変なんですね」

「フフ、でもその大変さが楽しくてたまらないの。2000年もあの暗闇の中にいて、楽しいことも悲しいことも何もなかったんだもの。……それもこれもアラン、貴方のお陰よ。改めてお礼を言わせてもらおうわ。……ありがとう、アラン」

「えっ？」

「……？ 何を驚いた顔をしているの？」

「いえ、そんな、神様が俺なんかにお礼を言うなんて」

「フフ、何を言っているの？ 神様が人にお礼を言っただけじゃないなんて初めて聞いたわ。それにアランは普通の人間じゃないもの。神力を持つアランはもう、神霊界で今一番注目されている人間なのよ？」

え……。まじですか？ 神様達の間で噂になってるなんて、随分とぶっ飛んだ話で実感が沸かないけど、大変な事態なんだってことはわかる。

そして判明したミミ様の封印されていた期間はなんと2000年。封印されていた間ずっとミミ様はあの暗闇で過ごしていたことになる。

今こうやって笑うことのできているミミ様を見ると、あの城探検も無駄じゃなかったと思う。……怒られた甲斐があったってものだよ。

「そういえばアラン、貴方折角の能力をあまり使っていないのね？ もったいないからもっと使ったほうがいいと思うわよ？」

能力……確かにあまり使っていないかも知れない。

というのも、あまり不特定多数に使うと、この世界のバランスを崩すことになりそうで気が引けるというか……。

今のところ俺が能力を使った相手は両親とフィアス、それにジュリオとラスくらいだ。

「貴方が何に不安を感じているかはわからないけれど、その力はいずれにしろこの世界に変革をもたらす為の力なのだから、もっと使った方がいいわ。それに、それが貴方をこの世界に転生させた神様の御意思でもあるはずよ」

「そうなんですか？ それにしても世界に変革って、随分と大きな話な気がしますけど……」

「単なる道楽でそんなに強大な力を与えるなんてことはしないわ。その力は本当に素晴らしい力。自分で能力のことを言っていたでしょう？ その能力の効果はその存在のアランに対する親愛度、若しくは従順度に依存するということを。私もアランの力を体験したかわかるのだけれど、もしアランが力を与えた相手がアランをよく思っていなかったり、危害を加えようとしたら、その力は衰えるか全て失ってしまうことになるでしょう。それに――」

それに、それは表面上の思考ではなく、想念の部分で左右されるからどんなに隠そうとしても無駄なことだそうだ。

今までは本当に俺のことを好意的に捉えてくれている人達だけに能力を使っていたけど、それを利用することで相手との距離を測ることが出来るし、訓練次第では能力によってどれくらいの効果がどういった部分に出ているのか、そういうこともわかるようになるかも知れないとのことだ。

自分がどう思われているかがわかったって、せいぜいその人に近づかないようにするだけだと思っただけで、能力が人によってどう

いった部分に作用するのかがわかるというのは面白い。

今後は当分の間、ミミ様にアドバイスを貰いながら能力の使い方を覚えていくということになりそうだ。

——そして翌日、俺はミミ様を両親に紹介した。

「はじめまして。イツパ・パロ・ミミラトルと申します。私はかつてこの地を治めていた神族の端くれです。以後、お見知りおきを」

ミミ様の丁寧な挨拶になんだかものすごく驚いている様子の二人は、時間が止まったかのようにその動きを止めている。

ミミ様はそんな二人の反応を気にする様子もなく、ただ優しい笑み浮かべながら反応を待つ。

「……え？ ……は？ ……えーと、かみさま？ はじめまして…
…？」

父は状況について行けないようで頭にいくつも？マークを浮かべながらも挨拶を返しているが、母のほうは目を見開いてミミ様を見つめたまま動かない。

「……くの……人……？ ……まさか、そんな……」

何を言っているのかは聞き取れないけど、そりゃ神様がいきなり

目の前に現れたら、びっくりするだろうなあ。

フィアスだけは「あ！ お姉ちゃんだ〜！」と言ってミミ様に駆け寄り、気持ちよさそうに頭を撫でられている。

フィアス、ミミ様と知り合いだったの？ と聞くと、フィアスは満面の笑顔で「うんっ！」と返事をする。……可愛い。

そういえばフィアスに能力を使ってもあまりその効果を実感したことはなかったんだけど、もしかしたらその可愛らしさに効果が出ているんじゃないだろうか？ と思う今日この頃。

ミミ様を両親に紹介したその日のうちに噂の幽霊の正体は実は神様だった！ と話は広まった。

目撃者達の捉え方はそれぞれだったが、概ね安心して居る様子が見て取れた。

中には「神様を見てしまった！」と感動している人もいて、今度には逆にミミ様を見てみたいという使用人や兵士達が続出。

その後、深夜の当番を希望する使用人や兵士が後を絶たなくなってきたとか。

18話 「能力」

18話 「能力」

ミミ様の指導のもと、能力開発に乗り出したわけだけど、まずは能力を使いまくることから始まった。

能力を使うのに慣れ、その過程で俺に流れている神力を感じることが狙いだ。

ただ、能力を使うと言っても人よりも圧倒的に獣の多いこの土地のこと。

俺が能力を使った対象の9割は獣達だった。

ちなみに俺が能力を使う獣については一つの種族につき2匹までと決めている。

これはミミ様とも話し合った結果ではあるけど、能力を使っていない獣との差を測るのに便利だからということ、何より一つの種族に能力を使いすぎると生態系を崩しかねないということを考えてのことだ。

能力を使った獣達にはみんな「自分達の種族を率いてまとめる事」「自分の力を無闇に使ってはいけない」ということを約束をさせることにしている。

この約束を破ってしまった場合は残念ながら「俺に従順なほど力の上昇具合が高い」というレベル2の能力の仕様上、力を失ったのだの獣になってしまうことになる。

とりあえず今のところ、約束を破った獣はいない。

能力を使った獣の力の上昇具合についてはかなり変わったのが見て取れる。

例えば地を走る獣だったら、走るスピードが他の獣の倍以上に速くなったり。

鳥だったら、普通の鳥に比べて倍以上の速度で飛んだり。

明らかに物理法則を超越したような動きをする獣もいて、無意識に術を使っているのではないかと思うものもいた。

弊害？　として、俺に寄ってくる獣が増えすぎてその対処に困るといったことがあるけど、ラスが獣達を取りまとめられているので大きな混乱は今のところない。

あと、実験の結果、虫に能力を使うのは断念した。

獣と違って虫には個別の意識みたいなものがないらしく、力を使ってもそれほど変化がなかったからだ。

ミミ様に聞いたところ、虫っていうのは精霊とかと同じように集合体として使役される存在であって、個別の意識を持って活動する生物ではないんだとか。

大地、自然の一部のようなもので、そもそも確立した一個の魂を持つ人や獣とは魂のつくりが違うんだそうだ。

存在としては植物なんかと同じようなもんらしい。

ミミ様は神様なので、精霊やらを使役するのは大得意なので、虫を使役するところを見せてもらったんだけど……。

……正直見なければよかった。

ミミ様は黒い甲殻虫を群れで使役して見せたんだけど、その虫はまさしく前世でいう油虫。通称ゴ……。

……なんでもない。

ええ……、それが群れで這いまわったり、飛んだりするのは……、正に悪夢。

別に虫が苦手っててなわけではないんだけど、さすがに背筋がゾワゾワしたよ。

蟲術というのもこの世界には存在していて使える人は稀にいます。ただ、大体は禁術指定になっていて開発者も変人が多いって言うし、関わりたくありません。

とりあえずそういった理由からレベル2の俺の能力は効果をなさない。ってことがわかった。

そもそも数が多いし、細かな虫達一匹一匹に能力を使うのは無理があるってことだ。

最後になってしまったけど、人に対しての能力を使ったことについて。

獣の場合は能力を使ってすぐにその効果を見て取れたんだけど、人の場合はゆっくりと効果が出るんだということがわかった。

そして人によってその効果が出る部分というのは異なっていて、父のように運動能力や肉体的要素部分に効果が出る人。母のように

精神力に効果が出る人。ジュリオのように記憶力や頭の回転に効果が出る人など、多岐に渡った。

季節は巡り、夏。

俺は10歳になった。

大地は緑に溢れ、森の中は鳥や虫の音が鳴り止むことはなく、強い日の光に照らされたレイナル領には様々な生命が満ちていた。

ミミ様が戻ったお陰で今は神様の世界もうまくまわっているらしく、この2年でレイナル領の自然環境も随分と改善され、レイナル領が過酷な土地だということとはなくなった。

神様の世界っていうのはめっちゃ厳しいそうで、いきなりミミ様がいなくなって、かといってその代役も立てることもできず、部下の神様や精霊達が必死でこの土地を統治していたそうだった。

そのため、ミミ様がいなくなっていた期間、夏は灼熱の大地で一部の土地が砂漠になったり、雨季であらゆるものが流されたり、水没したり、冬は積雪が酷かったり、とにかく季節ごとに起こる自然現象が極端だったらしい。

おかげで2000年もの間、レイナル領は常に不安定な気候で土地も恵まれず、普通の人々が近づくことも無かった。

早朝、いつものようにラスと城外へ出かける。

適当に開けた場所で剣と法術の鍛錬をしつつ、ラスが連れてくる獣に能力を使う。これがここ最近の俺達の日課となっていた。

「あゝ……。いや、それはいいらない。うん、自分で頂いてください。……君のそれも、自分で食べちゃっていいからね？」

今俺が何をしているかというところだ、獣達からの貢物を断っているところだ。

昆虫やら芋虫やら、カエルとかもらっても……。ねえ。

今も得意げに獲物を咥えた猫っぽい獣と鳥に遠慮してもらったところだ。

シヨンボリ気味に貢物を咥えて俺のもとを後にする彼らを見ると心が痛むけど、いらぬものはいらぬです……。

「個人的には食べ物よりも貴金属とかのほうが嬉しいんだけどなあ……。……。というかそもそも貢物なんかいらぬし……。」

そんなやりとりを何度か繰り返しながら俺が素振りをしていると、急に獣達が大人しくなった。

見れば、獣達が道を開けて傳えている。道の中央を悠々とこちらに歩いてくるのは白銀の毛皮を持つ狼。

この2年でこの辺りの獣達の頂点の存在としての貫禄も出て、体もすっかり大きくなり、見上げる大きさにまで成長したラスだった。

俺も結構大きくなったんだよ？ 身長も140センチくらいになったしね。

比べるような同年代の子供も周囲にいないから俺がこの年齢で大きいのかどうか判断つかないけど……。

ラスの体毛の変化について、俺は最終的にパンダのようになって更に愛らしいものを見せてくれるのかと密かに期待もしていたのだけれど残念ながらそうはならず、白い毛は結局それほど広がらずに黒い毛が徐々にグレー、そして白へと変化していっただけだった。

ラスは今日もまた口に獣のようなものを咥えていて俺の前で獲物をそつと地面に置くと、その真っ赤なつぶらな瞳で俺を見つめてくる。尻尾はちぎれるんじゃないかと心配になるほどブンブンと激しく振られていて、その目は『褒めて、褒めて!』と俺に訴えていた。

俺はラスの首のあたりを豪快に撫でてやり、ラスの口に咥えられてきた獣を見るが、ラスの口に咥えられてきた茶色のふさふさな毛皮の獣はピクリとも動かない。

もしかして、死んじゃってるんじゃないか……?

そんな考えが頭に浮かびながら倒れている茶色のふさふさを眺めること数秒、茶色のふさふさから音が漏れる。

「……殺せ……白き森の王よ……」

「喋った!?!」

「……っ!?!」

そのフサフサは跳ね上がるようにその顔をあげる。

獣かと思いこんでいた茶色い毛皮のそれは、毛皮を着た小柄な子供の姿をしていた。

いや、子供にしては少し老けているような気がするけど……。

「……子供？」

「……む！？ お前だって子供ではないか！ 俺はコボルト族、樹東の森の村の村長だぞ！？」

19話 「コボルト族の村長」

19話 「コボルト族の村長」

「コボルト族？ 村長？」

「そうだ！ 俺は村長様だ！ 決して子供などではない！ こう見えても俺は大人なのだぞ！ 子供だっているのだぞ！？」

目の前の自称コボルトの村長さんは自分を子供ではないということとをひたすら主張している。

そんなに子供だと言われたことがショックだったんだろうか……？

コボルトの村長さんの体格はかなり小さめで多分身長は1メートル弱くらい、犬と人間の中間のような顔立ちをしていて大きな耳は垂れ下がった形をしており、茶色い髪の毛のところどころには白髪が混じっていた。

でも、遠目から見れば完全に子供だよなあ……。

というか、子供いるんだ……。

「すみませんでした。とてもお若く見えたもので……」

「フンッ……」

コボルトの村長さんは顔を若干横に向け、目だけをこちらに向けてジロジロと見つめてくる。

その目は俺を品定めしているようで正直気持ちがいいものではなかったが、この場合は仕方がないだろう。

「……」

「……お前、見たところ人間の子供のようだけど、ここで何をしていたんだ？」

「えーと、剣の修行を」

「……修行？ お前みたいな子供がこんな森の中でか！？ 獣に襲われたらどうするんだ！？ この森は危険がいっぱいなんだぞ！？ ほら、そこにもいるように赤熊や斑山猫なんかの危険な獣が……って、うわぁ！？」

そこまで言いながら俺の背後を指差して固まる村長さん。

「あああ赤熊に斑山猫！？ 雷蛇もいる！？」

特に気にしていなかったけれど、確かに赤熊や斑山猫と呼ばれた獣達は体も大きいし、森の中ではあまり会いたくないような様相をしていた。村長さんの口ぶりからするとやっぱり危ない獣達なんだろうか？

「うわっ！？ うわっ！？ うわっ！？」

俺がのんびりと考えているその間も村長さんは混乱の真っ只中。早く止めないと彼の精神衛生上よろしくない気がしてきた。

「落ち着いてください。大丈夫、彼らはみんな友達なので襲ってなんかきませんよ」

「い、いいいやお前、ああ赤熊に斑山猫だぞ！？ 特にこの季節は繁殖期が重なるから、奴らの縄張りに入るだけでも、あ、危ないんだぞ！？ お前知らないのかっ！？」

完全に取り乱してる……。さて、どうしたものか？

俺はチラッと村長さんの背後にいるラスを見る。俺と目が合うとラスは「わかった」と応えるように耳だけをピクピクと動かすと、徐にその大きな体を起こして遠吠えをはじめた。

「アオーーーーーー………！！！！」

甲高く、それでいて透き通るようなラスの遠吠えは染み渡るように森の中に伝わっていく。

ラスの長い遠吠えが通り抜けた森は静まり返り、さっきまで聞こえていた鳥や虫の鳴き声までもいつの間にか消えていた。

さっきまで俺たちの周りにいた獣達はいつの間にか姿を消し、辺りは静寂に包まれている。

で、肝心の村長さんかというと。

「……」

「……また固まってる」

器用にも目の前を指差し、口を半開きにして目を見開いたまま。

気は失っていないようなので村長さんの肩に手を置く。すると一瞬、ビクッ！！　　と飛びあがり、小刻みに震えながら俺を見上げてきた。

「大丈夫ですよ。もうみんななくなりましたし、ラスも大人しいですから」

自分を攫った相手に対して安心なんてできないだろうと思いつつも、とにかく村長さんを宥める俺だった。

まだラスの存在にビクビクしている感じはあるけど、なんとか落ち着きを取り戻してくれた村長さん。名前をサルベと名乗った。

サルベさんは森で薬草採集をしているところだったらしい。

なんでわざわざ自分でも危険だと言っていた森で薬草採集なんかしていたのかと聞くと、この夏、村では流行病が流行ってしまったていて、その治療に必要不可欠なのがその薬草なんだとか。

この病自体は特に珍しいものでもなく、薬草さえあれば特に危険もなく治るとのことなんだけど、今年はいつもの以上に病にかかる人が多く、村で備蓄していた薬草も底をついてしまったらしい。

危険な森なので村の若者数人を従えて行動していたところ、突然

現れたラスにサルベさんだけが捕まって今に至る、とのことだ。

ご迷惑をかけて本当に申し訳ない……。

「それで、薬草は集まったんですか？」

「いや、村を出てすぐ森の王に捕まったから、これだけしか集まっていな。一緒にいた若者達は村に逃げ帰っているだろうから、そっちも期待もできない……こうしている間にも村の者達は……」

サルベさんが腰に吊るしていた袋の中にはその薬草と思われる植物が3束だけ入っていた。この量ではぜんぜん足りないらしい。

俺はラスがサルベさんを無理やりここに連れてきてしまったこと、そしてそのために薬草を思うように収集できなくなってしまったことへの罪悪感から薬草採集の手伝いを申し出ることにした。

といっても、実際に集めるのは俺ではないんだけど。

ラスに薬草を渡し、これと同じものを森の獣達に集めてもらうようにお願いをした1時間後。俺とサルベさんの足元には大量の薬草が積まれていた。

獣達から次々と届けられる薬草の山は既に俺の腰の高さにまで届こうとしていた。

「お、お前、一体どんなやつなんだ……?」

サルベさんはあまりの出来事と薬草の量に呆然としながらも薬草

を一つ一つ確認する。

「……全部大丈夫、本物だ。これだけあれば村の者も助かる。とにかく感謝するぞ、アラン」

「俺じゃなくて、実際はラスと獣達が取ってきてくれたんですから、お礼はそっちに言ってください」

「……そうか。森の王と獣達よ、本当に感謝する」

サルベさんのお礼を聞いた獣達は一様に誇らしげな雰囲気醸し出している。

それにしてもこの量……。こんなに集まるなんて思ってもみなかったな。

「サルベさん、もし良かったら村まで持っていくのもお手伝いしましょうか？」

「本当か！？ 実はあまりに多すぎるからどうやって運ぼうか悩んでいたんだ。手伝ってもらえるならありがたい」

「あ、でも俺みたいな人間が村に入ったりするのは問題ないんですか？」

「いや、お前は信用できる人間みたいだから大丈夫だ。でも、人間を怖がる村の者は多いから気をつけ……」

そこまで言うとなサルベさんは俺の足元から頭の先までを繁々と眺める。そして「でも、お前みたいな子供なら大丈夫だな」と言葉を

続け、一人納得したような表情を浮かべた。

俺は何か釈然としないものを感じながらもサルベさんと共に樹東の森の村へ向かうことになったのだった。

20話 「樹東の森の村」

20話 「樹東の森の村」

「ここが……」

「そうだ。ここが樹東の森の村だ」

……子供の村？

村を目にした俺は素直な感想を心に思い浮かべた。……口に出して言うてしまったらサルベさんがまた怒り出すと思って、絶対に口には出さないけど。

樹東の森の村はその名の通り深い森の中に位置していて、コボルト族とホビット族が共同で生活を営んでいた。

コボルト族は獣人族に属する男性種族で、外見は人と犬の中間のようで身長は大きい人でも俺と同じか若干小さいくらい。

次いでホビット族の特徴だけど、外見は若干耳が尖がっていること以外はほぼ人間の子供と大差ない。しかしホビット族は両性種族なはずなのに、この村ではホビットの女性しか目にすることはなかった。

両種族とも老化が分かりづらい種族で、俺にはどの人も子供のように見えるのだった。

ちなみに獣や人間対策のためか、村の周囲には高度な結界が施されており、鍵を持っていないと村に辿り付く事はできないようになっていた。

結界の仕組み自体は単純なもので、結界の範囲内に鍵を持っていないものが入ったら方向感覚を狂わせて村には辿り着けなくさせるというもの。

しかし、その範囲や効果が広大かつ強力で、これほどの大結界なら何かしら大掛かりな施設みたいなものが必要んだけど、村にはそういったものは見当たらなかった。

村の建物は簡素な木造住宅が主で、屋根の部分には大きな葉っぱが使われている。

当然建物も村の住民の体に見あった大きさなので、生活感さえなければ子供用のテーマパークの一つかと思ってしまいうくらいだ。

「……村長！？ 生きていたんですか!？」

村に入っつてすぐ、たれ耳のコボルトから声をかけられたサルベさん。

駆け寄ってきたたれ耳のコボルトはまるでお化けでも見たかのような驚きの表情をサルベさんに向けている。

「ネルコ達から薬草採集の際、突然現れた巨大な魔獣に食われて死んでしまったと聞いたんですが……」

「勝手に殺すな！ 見ての通り、俺は食われてないし、死んでもな

いぞ！」

そう言ってその場でクルッと一回転してみせるサルベさん。
その姿がなんだか可愛いと感じてしまったんだけど、中身はいい年のおっさんなんだよな……。

ネルコ達っていうのは、サルベさんと一緒に薬草採集をしていた村の若者達のことらしい。

あの体の大きなラスに捕まったりしたら普通は死んだと思うよね。仕方がない。というかごめんなさい。

「そうですか！ 本当に良かった！」

そんなサルベさんの行動を見て納得したかのように喜ぶたれ耳のコボルト。

「……ところで村長、その大きな袋は？」

「ああ、ラコ草だ」

「ええっ！？ そんなに採れたんですか！？」

「ああ、すぐ病人に配れるように手配してくれ」

「はい！ わかりました！」

たれ耳のコボルトはその場を後にとすぐに10人ほど村人を連れてきて、袋いっぱいこのラコ草を俺とサルベさんから奪っていった。

というか、なんというか……ね。村人の誰にも突っ込んでもらえないんだけど……。

サルベさんも忙しそうに指示を出しているし、薬草も無事に届けられことだし、俺もう帰っていいかな？

まあいいや、帰る前に適当にその辺を見てみようっと……。この村の結界がどうなっているのかも気になるしね。

＼side サルベ

さっきネルコ達も謝ってきたが、森の王に啜えられたときは本当に死んだと思った。

あいつら、森の王が出たとき、真っ先に逃げやがって！ しかも俺が死んだなんて噂まで流しやがって、勘弁ならん……！ 全く、最近の若いやつらは！ 今度徹底的に……。

……。

……まずいまずい。

俺は村長なんだから、寛容なところを見せないとな。うん。

ネルコ達には罰として3ヶ月の村外の見張り役を命じてやった。俺はなんて寛容で大きい男なんだ。

村の者が総出でラコ草を煮詰め、病人に配ってまわる。

毎年のことだが、この夏は特に感染者が多かった。

この病で死人が出ることは滅多にないが、寝込んでしまっても畑仕事もできなくなってしまうのはこの時期、大きな痛手だ。

ただでさえここ2年ほど狩りに出ても獣が獲れにくい状態だったのに、畑仕事までできなくなったらみんな飢えてしまう。

動けるものが総出で配るとその日のうちにラコ草は全病人に行き渡り、余った分は備蓄として村の倉庫に保管されることになった。

これだけあれば仮に村の住人全員が病にかかってもしばらくは大丈夫だろう。

それにしても獣自体が減ってるってわけでもないというのに、なんで獲れなくなったんだろうな？

小物を獲る罠にも引っかけにくくなっているみたいだが、何でだ？ 考えてもさっぱりだ。

翌日、ラコ草の効果が出たのか、大半の村人は容態が楽になったと報告を受けた。

一時はどうなることかと思ったが、これで一安心だ。良かった良かった。

あの森の王とアランとかいう人間に感謝しなければいけないな。

ん？ ……あらん？

……そういえば、一緒に村まで来たはずのアランの姿を見ていないな……。どこにいったんだ？

あいつのことなど、忙しくてすっかり忘れていた。

昨日から見えていないが、もしかして勝手に帰ったのか？

お礼も言わず終いだっただが、悪いことをしたな……。

俺はどうもひとつのことに集中しだすと周りが見えなくなってしまうらしい。反省せねば。

今度会うことがあったら、せめて魚でもご馳走してやることにしよう。

21話 「樹の上から」

21話 「樹の上から」

「貴様ら何者だ!？」

俺の足元には、地面に突き刺さっている矢。

「どどどど、どうしよう!？」

「ああああ、謝るしかないよ!」

後ろには俺よりも体の小さなコボルトとホビット。

「答えろ!」

遠く離れている樹の上から弓矢をこちらに向け、殺気立っている
エルフのお姉さま。

……どうしてこうなった？

数時間前、サルベさんや村の住人に存在を認識されなかった俺は村をふらついていた。

村の中は村の人が総出で薬草を調合したり、配ったりしていて、部外者があまりうろついても邪魔になるだけだと思い、俺は気になっていた村の結界を調べようと思い付き、村の外へと足を進める。

「この結界の感じだと、あっちが中心っぽいかな」

結界の中心は方角的には来るときに入った村の入り口とは反対方向で、村の集落を抜けると用水路と畑が広がっていて、何か作物を栽培しているようだった。

トマトのような赤い実をつける蔓や、レタスのような丸まった葉っぱのような作物を眺めながら、農道と思われる道をひたすら進む。

「おーい！ そこのお前ー！」

村を背に、更に結界の中心に近づこうと森の奥に足を進めようとしていた俺は、突然投げかけられた頭上からの声に足を止める。

声の方向を見上げると、木漏れ日を背にしているためにそのシルエットしか確認できないが、大きな樹の枝に子供が二人、俺を見下ろしていた。

この村のことだから本当に子供かどうかは疑わしいところではあ

るんだけど、多分子供だろう。

何故なら、声が甲高い子供の声だったからだ。村の大人達はサルベさんをはじめとして見た目はあれだが、声だけ聞けば人間の大人と変わらない低い声をしていた。

「お前、樹南の森のやつかー!?」

「樹南……? ……いや、違うよ!」

樹の上の子供はそのまま俺に話しかけてくる。

少し距離があるので声を張らないとお互いに会話しにくいのが難点だ。

「樹南じゃないのかー!?」

「ああ、違うー! 俺は森じゃないところから来たんだよ!」

それにしても樹南の森ってどこにも村があるのか? っていうことは樹西とか樹北みたいな地名が他にあったりするんだろうか?

「ふーん? まあいいや。……よっ……と!」

そう言って飛び降りてきたのはコボルトの子供。

おいおい、結構な高さがあるけど大丈夫か? という心配をよそにコボルトの子供は軽やかに着地する。

気の強そうな印象を受けるこのコボルトだが、やはり子供なんだろう。身長は低く、俺の胸くらいしかない。キョロキョロとした丸い目は小動物を意識させ、何故か尻尾は激しく振られている。犬

なら興奮しているってことだろうけど、コボルトは果たしてそれに当てはまるのだろうか？

コボルトの子供は無遠慮に俺を足元から頭の先までじろじろと眺めると、やんちゃそうなその口を開いた。

「お前、こんなところで何やってんだ？ この先行ったら怒られるんだぞ？」

その口ぶりからすると、怒られたことがあるんだな？

「そうなの？ でも、この先に何があるのか気になってさ」

俺が森を見やると、つられてコボルトの子供も森に目を移す。

「この先にあるのは樹央の森じゃん。そんなことも知らないの？」

「今日この村に着いたばかりだったからね」

「へー？ お前やっぱり樹南の森のやつじゃないんだ？」

「うん、それで樹央の森だっけ？ そこまでの距離ってどのくらいかわかる？」

「きより？ きよりって何だ？ 食い物か？」

「あー……。どれくらい遠いかって事。歩いてどれくらいかかるかわかるかな？」

「えーと……。トー！ お前わかるかー！？」

少し考える素振りをして、樹の上のもう一人の子供に尋ねるコボルトの子供。

「……！ ……！」

「あー！？ なんだってー！？」

トーと呼ばれた樹の上の子供は身を乗り出して返事をしているようなのだが、その声は木々のざわめきや虫の声にまぎれてしまい、聞き取ることが出来ない。

「……！ ……！」

「何言ってるかわかんねー！ いいから降りて来いよー！」

「……！」

声が聞こえ難いことにヤキモキしたコボルトの子供が声をかけると、樹の上のトーと呼ばれた影はその場でゴソゴソと縄を垂らしてスルスルと降りてくる。

「コー兄、勝手に降りないでよー」と不満そうな声と共に樹の上から降りてきたのは、可愛いホビットの女の子だった。

「トー。お前まだそんな縄なんて使わないと降りられないのかよ」

「お父さんだって、面倒くさがらなくてきちんと縄を使いなさいって言ってたもん」

慣れた身のこなしで地面に降り立つトーはコー兄と呼ばれたコボ

ルトの横に並び立つ。

変わった名前かと思った。これはあだ名で、ホビットの女の子はトリスという名らしい。兄のコボルトはコッカス。

トリスは茶色い髪の毛の頭の後ろで束ねて三つ編みにしていて、兄と同じようなキョロキョロとした小動物を思わせる丸い目をこちらに向けている。頬と鼻にかけて広がるそばかすがなんとも可愛らしい。

見た目は本当に人間の子供そのものだけど、人間とは違う尖った耳が俺とは種族が違うのだと教えてくれていた。

トリスは村では見掛けない俺に若干警戒しつつも、樹央の森までのくらいかかるか教えてくれた。

樹央の森へは半日も歩けば入ることが出来るとのことだ。

「でも、コー兄も言ってたけど、お父さんに怒られちゃうんだよ？」

要するに子供だけで遠くに行くとは叱られるってことか？ 迷子になって帰れなくなるって可能性もあるからな。

ちなみに結界のおかげで大型の獣なんかは入れないようになっているらしい。

「俺はこの村の子供じゃないし、怒られることはないから大丈夫だよ」

俺はそう言って一人森の奥に向かおうとするが、「お前、そんなこと言って、後で怒られても知らないぞ」とか、「だめだよ！？」本当に怒られちゃうよ！？」とコッカスとトリスは俺を必死で行かせまいとする。

そんなに怒られるのが嫌か……。いや、誰だって嫌だと思うけどね。

そういえば怒られるで思い出したけど、なんだかんだで家に連絡をするのをすっかり忘れてた。

……やばい。

……後でオウムのポータに伝言頼んでおこう。

ちなみにこの真紅のオウムは俺が能力を使った鳥の一匹なんだけど、能力を使ったおかげで色んな鳥の鳴き真似はおろか、人の声まで完璧に再現できるようになってしまったのだ。その上知能も上がっているから簡単な会話くらいならできるようになっている。

名前はポータ。ポータではなく、ポータ。名付け親はフィアス。同種のオウムと違い、頭部に立派な羽が角のごとく生えているのが特徴だ。

「リョウカイシタゼ！」

「くれぐれも連絡するのを忘れていたってことは言っちゃ駄目だからね！ わかった！？」

「リョウカイシタゼ！」

うん。

……不安すぎる！

だけど今はこれしか方法がない。ポータを信じて任せよう。

コッカスがポータを見て「うまそうだな……」と呟いていたのを聞いていたのか、ポータは通常の3倍の速度でレイナル城へ飛んでいくのだった。

森に入ってから2時間は経過しただろうか？ 俺達は森の中の小道をひたすら進んでいた。

コッカスとトリスもこの森に慣れていないであろう俺を案内するという親に対する言い訳を見つけたためか、結局同行している。

「お前、年はいくつなんだ？」

先頭を進む俺にコッカスが話しかける。

何故俺が列の先頭を進んでいるんだろうか……？ 三人の中で一番背が高いからといっても、なんだか釈然としない。

「俺は10歳だよ」

「じゃあ、俺のほうが年上だな！」

「私もだねっ！」

「えっ？ 二人はいくつなの？」

「俺は12歳。トリスは11歳だ！」

おおぅ……。見た目7歳か8歳くらいにしか見えないのに、まさか年上だったとは。

本当に樹東の森の村の人たちの年齢がわからない。

トリスは「わーい、私お姉ちゃんだ！」なんて喜んでいるけど、どう見ても俺のほうが年上です。

「アランはこれから俺のことを兄貴って呼ぶんだぞ」

「じゃあ私のことはお姉ちゃんだね！」

俺はいつの間にか弟認定され、それからはここ最近肉を食べてなくて力が出ないとか、魚が大量だったとか、木の実を何十個も集めたことがあるだとか、でっかいカブトムシの捕まえ方を教えてやるだの、他愛もないことを話しながら道を進んだ。

コッカスが冗談を言い、トリスが突っ込み、俺が笑う。和気藹々とした空気が三人の中に満ちている、その時だった。

音もなく俺の足先数センチ先の地面に突き刺さる矢。

数瞬の後に聞こえてきたのは明らかに殺気と怒気を含んだ女性の声。

「そこの3人、そこで止まれ！」

樹の上から姿を現したのは、光り輝く美しい金の髪を有するエル

フの女性だった。

——というわけで、エルフのお姉さまに睨まれている俺達。

さて、どうしよう……。

「答えろ！ 何故人間がここにいる！？」

「ええっ！？ お前、ホビットじゃなかったのか！？」

「人間っ！？」

ああ、やっぱりそう思われてたのか……。なんの突っ込みもないからなんとなくそうなんじゃないかと思っていたけど、やっぱりちよつとショックだ……。

22話 「東の枝」

22話 「東の枝」

金糸のような美しい髪が揺れる。

腰まであるその髪は蔓のようなもので束ねられていて、青々とした葉と小さな薄桃色の花がそこに色を加えていた。

「もう少し歩けば東の枝に着く。そこまでの辛抱だ」

「わかりました。アルティリエさん」

「ここまで来たの初めてだ！ 俺わくわくしてきた！」

「ちょっと、コー兄！ みんなに迷惑でしょ！ そんなにはしゃがないのっ！ ごめんなさいアルティリエ様。兄が煩くて」

「……ティーリでいい。これからはそう呼べ。それに普通に喋ればいい」

「うん、わかったよ。ティーリさん」

「ティーリさん。あとどれくらい？」

「ちょっと、コー兄！」

あれから樹東の森の兄妹と共に、今度はエルフのお姉さんに連れられて東の枝というところへ向かっている。

森の中は進むにつれて背の高い木々が増え、その木々に日の光を遮られて、辺りは次第に薄暗くなっていった。

獣道のような道なき道を、ティーリさんが鉈のようなナイフで行く手を阻む草や木をなぎ払いながら進んでいく。

「気をつけろ、一応切ってはおいたがその草には鋭い棘がある」

「あ、はい」

「足元に大きな根がある、気をつけろ」

「はい」

「その蛙は毒を持っている。触るなよ。もし触ってしまったらすぐに言え。水で洗い流せば大丈夫だ」

「はい」

アルティリエと名乗るエルフのお姉さんは言葉こそ素っ気無く感じるけど、俺達に対して凄く優しくかった。

弓矢を向けられていたときは何だったのかと思うほどだ。

行く手に大きな水溜りがあったときなんて。

「お前の背ではここは危ないな。私に掴まっているといい」

「えっ？」

「ティーリさん。俺達上から行くよー」

「わかった。気をつけろよ」

「あーい」

「コー兄！ だからもっと言葉に気をつけなさいって！」

「ティーリさんがいいって言ってたしいじゃんか。それよりも早く行くぞ、トー！」

「ちょっと、コー兄！」

近くの木にスルスルと登り、枝や蔦を伝って移動していくコーとぶつくさと文句を言いながらも後に続くトー。二人とも身軽だなあ。というか、随分と楽しそうだ。

「ティーリさん、俺もあっちから行きます……」

「駄目だ」

「え？ いや、でも……」

「駄目だ」

「いや、でもあっちのほうが早そうな気が……」

それに女性につかまって移動だなんて、恥ずかしいし。

「なら早く行くぞ。しつかり掴まれ」

「えっ、わっ！」

いきなり抱き上げられた俺はバランスを崩しそうになり、慌ててティーリさんの首に手をまわす。

ティーリさんの髪が顔にあたり、花のようないい香りが鼻をくすぐった。

ティーリさんは俺を抱き上げたまま、腰まで水溜りに浸かりながら進む。

エルフといえば高貴で長寿で美しいというイメージを持つ俺だがティーリさんもその例外ではなく、美しい金の髪と白い肌。切れ長だが大きい瞳。顔は小さく、各パーツの配置は完璧。手足は長いし細い。胸は控えめだけど、まるでファッションショーに出てくるモデルのよう。

その立ち振る舞いも優雅で無駄がなく、ティーリさんがただ歩いているだけで見とれてしまうほどだ。

……まあ、そんな綺麗で触れがたい存在に抱きかかえられて俺はどうなったかと言えば……。

緊張と申し訳なさでいっぱいになってしまつて、抱き上げられたあとの記憶はあまり覚えてはいないのだった。

そして気が付けばいつの間にか水溜りを抜け、ティーリさんと手を繋いで歩く俺がいた。

その後、繋いだ手を離すことは何故か許されず、件の『東の枝』に到着したんだけど……。

度肝を抜かれました。

Side アルテリエ

子供達が目の前の光景を目にして、呆けたような表情のまま一言も喋らない。

ここに来るまでにあんなにも騒がしかったのに、だ。

霧の大穴にまたがる東の枝、その光景は確かに雄大だ。

眼下を見渡せばそこには霧の海が広がり、遠くには途轍もなく太い精霊樹の幹が微かに見えている。

「さあ、東の枝まであと少しだ。行くぞ」

いまだ呆けている子供達に歩みを促す。

私は視界の先にある東の枝のゲートを目指し、ゆっくりと歩を進めた。

繋いだ手を離すことなく……。

その暖かいものを手放すようなことを、私はしたくなかった。

我らの森は精霊樹を中心に構成されている。

精霊樹の枝が届く範囲を樹央。精霊樹の根が張られている範囲をそれぞれ樹東、樹西、樹南、樹北の森と呼び、これら全てを総称し、精霊樹の森と呼ぶ。

樹央の森は他の森とは異なり、精霊樹を守る切り立った崖に囲まれている。

この崖はまるで大地が精霊樹を大事にしまい、隠すように歪な円の形をしており、その崖の高さはどんな獣でも自力で登り降りすることはできないほどに高く切り立ち、たとえ木登りが得意な五手猿でも穴の底から大地まで登るのに丸2日はかかるだろうという深さだ。

そして崖の上から大穴に流れ落ちる水は底に着くことなく霧となる。そしてその霧はまるで大穴の底を覆い隠すように常に漂い、姿を消すことはない。

ちなみに五手猿とは長く広がった尾を持つ獣で、広がった尾を広げたり縮めたりと自由自在に操り、木を登る姿がまるで5本の手を使っているように見えるが故にそう呼ばれている。

外界から隔絶されている大穴の底は日の光が届かず、昼でも夜以

上に暗く、そこには一種独特の姿を持つ植物や昆虫が数多く存在しているが、我々でもどのような生物が生息しているかは把握しきれない。

外界から隔絶されている、という意味ではこの精霊樹の森もそうだ。

祖先が精霊樹の御力を御借りして構築した結界は、精霊樹に認められたものだけしか通すことはない。

故にこの森は安定していた。外界から危険な魔獣や悪意を持った人間を寄せ付けることがない故に。

……しかしそれも過去の話でしかない。

異変が起き始めたのはおよそ2年前。

絶対なはずの精霊樹の結界内に居るはずのない、在るはずのないものが目撃されるようになった。

はじめは樹東のコボルト族からの報告。

それを誰もが相手にすることはなかった。

慌て者の多いコボルト族のことだ。ただの見間違いだろう、と。

目撃されたのは、巨大で、白く輝く狼の姿。

有り得ない。

誰もがそう思った。

しかしその後も日に日に増える東西南北各氏族からの報告。コボルト族に至っては白き森の王などと呼び、敬うような始末だ。

結界を調べても異常は見当たらず、遂に長達もその重い腰をあげざるを得なくなった。

長達は私に命令を下した。「件の目撃情報を調査し、可能ならば対象を捕獲せよ」と。

……無茶を言ってくれる。

「なんで人間がこの森にいるんだっ!？」

「私達を騙したのねっ!？」

「いや、騙してないから!」

「すげー! 俺よりでかい年下なんて見たことないから、変だとは思ってたんだよ!」

「ちょっと、コー兄! 人間は怖いから近づくなって、お父様言っ

てたでしょ!」

「いや、でもアランだぞ? 大丈夫じゃねえ?」

「アランだって人間なのよ!?」

私が樹から降り、すぐ近くまで近づいているのにも気が付かずに言い争いをしている子供達。

白い巨狼を探していたら、人間の子供を見つけてしまった……。何を言っているのかわからないと思うが、私も自分の身に何が起きたのかわからなかった。

私はいつものように小鳥達の声を聞き、泉の水を口に含み、赤く色づいた果実を口に含み、森に流れる柔らかな風に身を委ね、森を巡邏していたはず。

遠く風に混じる子供達の賑やかな声を捉え、最初は単に迷子かと思った。

それならばいつものように道を示すか、もし子供だけならば村の近くまで送り届ければいい。近づく声を聞きながら私はそう考えていた。

目を閉じ、小鳥の目を借りて子供達を見る。

その目に映ったのはコボルトとホビットの子供。これは樹東の子供だ。

しかしもう一人。3人目の子供を見て私の思考は停止する。

黒く輝く髪。黒い瞳。丸い耳。かつて一度だけ見たことがある。

……人間。

子供達はこちらに気がつくことはなく、真っ直ぐ私のいる方向に向かってくる。

何故人間が？

何故村の子供と？

何故此処に？

何故よりもよって私が？　今までこんなことはなかったのに？

何故？　何故？　何故！？

気が動転してしまった私はどうすればいいのかわからず、とにかくその動きを止めようと思い、弓を引いた。

そして相手は子供だと言うのに、ひどく乱暴な言葉を向けてしまった。

その時の私の中の感情は驚愕と焦り。続いて後悔と緊張。最後に理不尽な運命に対しての怒り。

頭がどうにかなりそうだった……。

そして何故あの人間の子供はあんなにも魅力的に見える……？

その問いに応えるものではなく、答えは今も出ていない。

ただ言えることは、全てに措いて平穏と安定を好み、変化や混乱を良しとしない我ら樹霊族に何かが起きている。それも、かなりのことが。

冷静になった私は判断を長達に任せようと、その後はできるだけ丁寧子供達を、特に人間の子供を保護し、集落に向かうことを決意した。

生を受けて97年。この時まだまだ未熟だった私は気づくことができなかった。

この出会いが私の生に措いて、どれほど重要だったのかを……。

side コッカス

すげー！ すげー！ すっげー！

なにあれ！？ 枝がすっげー太い！

え？ あそこの上通ってあのすっげーでかい木のどこまで行くの

！？

まじでっ！？

早く行くぞ！ トー！

）side トリス

ちょっと、コー兄！ 引っ張らないでよ！

アランとティーリさんが呆れてるじゃない！

まったくもう！

……あれ？

あそこにいるのは……樹霊族の人たち？

え？　なんでこんなところにいるのかって……？　ティーリさん……は、アランと仲良く手を繋いでまだあんなところ！？

ティーリさん、早く来てー！

23話 「白き森の王」

23話 「白き森の王」

「件の獣を連れてくるのではなく、子供を連れてくるとはな」

「全く、お前は何をやっているんだ？」

「……済まない。とにかくこのことで長達に話したいことがある。
通してくれないか？」

門番と思われる2人組みのエルフが東の枝へと続く、太い木の蔓が絡まって自然にできたような門の前に立ち塞がっている。

声の感じからして2人とも男で、共にかなりの美形だ。エルフつてのはやっぱり美形しかないんだろうか？

門番のエルフは両方とも長髪で、髪を結っているほうと、髪を結わずにそのまま垂らしているほう。

髪を垂らしているほうが若干背が高く、二人とも長い杖のようなものを持っていて腕には草で編んだような瑞々しい腕輪をしている。

二人のエルフは顔を見合わせ、「確認する。待っている」とこちらに告げると、髪を結っているエルフは徐に腕を上げて何かを呟いた。

すると、パタタタ……と、頭上から小さな羽ばたきの音とともに飛んできたのは緑色の美しい小鳥。

腕にとまる小鳥にエルフは小声で話しかけている。多分小鳥を介しての伝達術なんだろう。

「獣と子供、どう間違えばそんなことになるのか、教えてもらいたいものだな」

「……」

小鳥を見送ったエルフの男はこちらを見ないまま、まるで独り言のように言葉を放った。

「あれが戻ってくるのにまだ時間はある。その辺で子供達のお守りでもしていたらどうだ？」

「……なんだか、偉そうな人たちだったね」

待てと言われたので門から少し遠ざかり、倒木に腰を下ろした俺は真横に座るティーンさんに声をかける。

「私は一族の中で一番の年少者だからな。それも仕方がない」

コーとトーはしばらく巨大な枝と遠く聳える大木を眺めていたんだけど、やがてその光景にも飽きてきたのか、そのうちに崖を覗き込んだり、崖に向かって石を投げてみたり、近くの木に登ってみたり、門番のエルフに話しかけたりと、ちょこまかと落ち着くことはなかった。

ちなみに全部主導したのはコーのほうで、トーはひたすら引っ張られていて大変そうだ。多分、いつもあんな感じなんだろうなあ。

「それにしてもティーリさん、件の獣って、何のこと？」

「ここ最近精霊樹の森で目撃される獣のことだ。私はその獣を調査し捕縛しろと命じられていた」

「獣？ でも、この森って結界で守られてるんじゃない？」

「そうだ。この森で居るはずのないものが目撃されているからこそ、調査している」

ちなみにここまで今現在もずーっとティーリさんと手を繋いだまま……。

いや、いい加減手が汗ばんできているので離したいんだけど、ティーリさんには一向に離してくれそうな気配がないし……。

美人と手を繋いでいるんだから、それ自体は歓迎すべきことなんだけど、大丈夫かな？ 汗でべとべとになって、不快な思いさせてない？

ティーリさんを見るとそんなこと気にもしていないらしく、前を向いたまま静かに話します。時折キュッと繋いだ手に力を込められるのが少しこそばゆい。

ティーリさんによると、その獣は2年ほど前から目撃されているものの、これといった被害を村や森に与えてはいないらしい。

ときどき獲物を口に咥えている姿も目撃されているらしいんだけど、大きさにこの森にいる獣ではないとのこと、この森で獲物をとっている形跡もない。

だからこそ本当にそんな獣がいるのかという話になっているそうだが、とにかく目撃談が多くて調査しないわけにはいかなかったらしく、もともと森の監視役だったティーンリさんがその役を受けたというわけだ。

獣の特徴は白い毛皮に赤い血のような目をしており、大きさは身の丈以上の巨大な狼の姿。その動きは疾く、音もなく風のようにいなくなってしまう。

そんな獣を捕まえろだなんて、エルフの長も無茶言いすぎじゃないだろうか。

というか……、……あれ？ 白い毛皮に赤い目の狼？ なんかそれ、すごく知ってる気がする。

「コボルト達は白き森の王などと呼んでいるらしいが……」

……。

……………。

……それ、ラスのことじゃん……。

「そういえば聞いていなかったな。お前は何故この森にいるのだ？」
俺は素直に答えた。もちろんその獣がラスのことかもしれないことも。

うちの犬がご迷惑をおかけして、ほんとにほんとにすみません……。

……なんか、ラスのことで謝ってばかりだな、俺。

「――俺がこの森にいる理由は、こんな感じです」

話し終えた俺を見て、ため息をひとつ。

困ったような、呆れたような顔をしながらティーリさんは口を開いた。

「……俄かには信じがたいが、お前が嘘を言っているようには見えない。……あの、お調子者のコボルトめ」

ため息をふたつ。

憂いを帯びたようなその横顔につい見とれてしまう。

「それにしても、その獣、ラスと言ったか？　その獣が何故この結界内に入れるのか、それがわからない」

独り言のようなその言葉。

数秒間思案した俺は、頭に浮かんだことをティーリさんに提案した。

「とりあえず、呼んでみましょうか？」

「……呼べるのか？」

「はい、この森の結界内にラスが入れるんですしたら、多分」

俺はそう言ってあの門番達の目の届かない場所まで移動すると、自分の持ち物の中から笛を取り出して吹く。

特殊な構造のこの笛には術式が組み込まれていて、普通の人間には聞こえない。ラス専用の犬笛みたいなものだ。

数十秒後。俺の真横で手を痛いくらいに握るティーリさんの目は鋭く、そしてそんなことを気にもかけていないかのようなラスは赤い目をこちらに向け、尻尾をブンブンと振っていた。

身構えるティーリさん。

「大丈夫ですよ、ラスは大人しいですから」

「あ、ああ」

そういつつもラスから目を離さないでいる辺り、かなり身構えてるなあ。

俺はラスにアイコンタクトをすると、ラスは俺の視線に頷きひと鳴き。

「わうっ！」

「なっ!？」

すると、ラスが突然吠えたのに驚いたのか、ティーリさんの手が

緩んだ。

「わううう……わう！」

ん？ ラス、変な声出してどうした？

「お前……」

「わうっ！ わうっ！」

「そうか……。色々と聞かせてもらいたいが、いいのだな？」

「わう！」

ティーリさんも何やらラスと見つめ合って、ラスの鳴き声に一人相槌をうっている。

え？ なに？ ティーリさんって電波系の人……！？ そっち系？

……なんて、思っていないですよ。

これは、もしかして？

「……アラン、ラスに触らせてもらうが、いいか？」

俺が馬鹿なことを考えていると、ティーリさんはこちらに向き直り、何やら許可を求めてきた。

「いいですけど。……もしかしてティーリさん、ラスの言ってることが、……わかるんですか？」

「ああ、わかるぞ。これからラスの記憶を見せてもらい、精霊樹の結界内に何故入れているのか、詳しいことを教えてもらうことになった」

さも当前のように答えるティーリさん。

俺は「そ、そうなんですか」と、曖昧な返事を返すことしかできなかった。

でもすごいな、流石はエルフって感じだ。

俺もティーリさんに教えてもらえば、ラスと話せるようになるんだろうか？

「では、いいな？　ラス」

「わうっ！」

ティーリさんは俺の手を名残惜しそうにそっと離すと、ラスに向かってゆっくりと近づく。そしてラスの顔にそっと手を添え、目を閉じた。

暗い森の中、ラスに身を寄せるティーリさんとラス。幻想的なその姿はまるで、絵画のように美しかった。

「な、ななな……!?!」

「すげー! でっけー!」

目の前の美しい光景に目を奪われていた俺は、突然聞こえてきた声に思わず振り返る。

振り返った先には、開いた口が塞がらないトート、尻尾をブンブンと振り、目を輝かせているコーが目をクリックにしてラスを見ていた。

「なあなあ! 俺も触ってもいいかな!?!」

「ちょっとコー兄、やめとこうよ! 危ないよ!」

「いいじゃんか、ちよっとくらい」

そうだよ、触りたくなるよね。ラス可愛いよね。
うずうずしているコーを見てなんだか嬉しい気分になる。

うちの城の人たちでもラスを怖がって触ろうとする人は少ないっていうのに、コーは本当に怖いもの知らずというか、将来大物になると思う。

「いいんじゃないかな?」

「やった!」

「でも、ティーリさんの邪魔しちゃいけないから、後でね。それと、

森の王じゃなくて、ラスだよ、コー」

「わかった！　って、なんでアランがそんなこと知ってるんだ？」

「それは、ラスと俺が友達だからだよ」

「……アラン、お前ってすごいな！　さすが俺の弟分だ！　じゃあ、アランの友達ってことは、ラスは俺の友達でもあるんだな！　……いや、俺の弟分第二号か！？」

なんだそのめっちゃくちゃな理論は……。

「コー兄！　なにわけわかんないこと言ってるの！」

そんなコーにすかさずトーが突っ込みを入れている。
スパーン！　といい音をさせながらコーの頭をはたくトーに是非ともスリッパを渡してみたい。

「いってー！　なにすんだよ、トー！　アランの友達俺の友達だろ！？」

「そこまではいいとして、森の王様がコー兄の弟分なわけないですよ！？」

「いいじゃんか、言ってみただけだよ！」

「言ってみることがいけないのっ！」

コーとトーのやり取りは続く。

見ながら俺は思った。

夫婦漫才かと。

話が終わったのか、ラスから離れてこちらに歩いてくるティーリさん。

『待て』をされた犬のような状態になっていたコーはすかさず「ティーリさん、終わった!?! 俺、ラスに触ってもいい!?!」とティーリさんに声をかけている。

それに対して「ああ」、とティーリさんの返事を聞いたコーは、飛ぶような勢いで寝そべっているラスに走り寄っていった。

「あんまり乱暴には触らないですよ?」

俺の注意なんか、聞いていないだろうなあ……。

ティーリさんはラスの言っていることを話してくれた。

自分の命を救ってもらった、何よりも大切な家族だと。自分だけじゃなく、他の種族に対しても優しくて大好きだと、そんなことを言っていたらしい。……なんだか照れる。

又、この精霊樹の結界内に入れたのは、何か変な壁みたいなものがあったから、好奇心で解除してしまったからだそうだ。

そういえば以前、母様に結界に干渉する術を教えてもらってたっ

けなあ……。俺もそれをラス相手に練習していたし、もしかしてそれで覚えちゃったのかも……？

とにかく記憶を見たお陰でラスがこの森にとって有害な存在ではないということがわかったらしく、一安心だ。

「それにしても、お前は本当に何者なのだ」

「……はい？」

「能力のことだ」

……ラス。……教えちゃったのか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4562o/>

王人

2011年10月8日00時10分発行